

江戸期正徳版『金光明最勝王經』とその信仰

— 井伊直治願經、訓読、浄嚴の陀羅尼梵音のことなど —

小島 裕子

はじめに

加州能登に所在する總持寺祖院の典籍調査において、經藏の聖教を披見するなかで、版經の義浄訳『金光明最勝王經』が確認された。^①それは一見して、私に所藏聖教にふれる機縁のある寺院、武州八王子の慈高山金剛院でかつて披見したものと同版の、全卷綺羅引きによる美麗な装丁の經典であった。^②

その奥書識語の冒頭には、

宝曆十歲次庚辰九月穀旦、秋葉任超以無盡藏財之余産、敬刻此經〔方印〕

＊読点は筆者

とあり、宝曆十年（一七六〇）九月に、秋葉任超が無盡藏財、すなわち信者から寄せられた「無盡物」の余剰の財をもつて、この經を敬刻したことが押印とともに認められる。折を送ると「東海道遠之乾、秋葉藏版、大登山金樹林」という小篆文字による嚴飾を伴う刊記が続き、東海は遠江の秋葉寺の任超和尚が開刻した「秋葉藏版」と知られる版經であった（以下、当該の「秋葉藏版」の最勝王經を「宝曆版經」と記す）。

一方の金剛院所蔵の「宝曆版經」は、次のような識語が墨書された經函内に収納されるものである。

最勝王經一字一石書写之砌奉求者也、安政二卯四月鬼宿、慈高山大宥

安政二年（一八五五）四月、同寺第十六世大宥が「金光明最勝王經塔」の建立と、塔下に『金光明最勝王經』の經文の文字を一石に一字ずつ書写する「一字一石經」の埋經供養を行うに臨んで求めたものであることが知られる。⁽³⁾義浄訳の『金光明最勝王經』（以下、義浄訳の金光明經を『最勝王經』と記す）と『法華經』とは、兩經が釈尊の無量寿なる靈鷲山說法による經典であり、護国經として国分寺制度のもとで全国的に流布したことで歴史的にも関係が深いが、その『法華經』に例の多い一字一石經の供養が、『最勝王經』にもなされた事例として注目される。⁽⁴⁾そこに、ペリー来航や尊王攘夷という内憂外患の情勢下に（後の同五年の安政大獄を前に）、相次いで勃発した東海大地震（元年）・南海道大地震・江戸大地震（二年、荒川河口付近を震源）の三大地震や、国内各所が火災や疫病などの災害に見舞われるなか、およそ一世紀前に開版された宝暦十年の「秋葉藏版」の摺經が、新たな祈りを込めて用いられたことが跡づけられる。こうした江戸期の版經を介して、奈良時代より護国經典として信仰を集めた『最勝王經』の受容の一端が垣間みられ、宗教史のなかに捉えることができる。

その同一の版になる總持寺祖院蔵の「宝暦版經」の伝來経緯を含めた研究が進むことは、祖院所蔵聖教の研究としても、また金剛院所蔵聖教の研究としても、ひいては『最勝王經』の經典研究、さらには具体的な信仰のあり方を追う宗教史的見地からも意義あるものと思われる。「祖院への伝來」については、同調査で「宝暦版經」を共に披見し、曹洞宗寺院の僧籍にあり修験道研究から秋葉山の信仰に造詣の深い武井慎悟氏の研究に譲り、ここでは、秋葉寺第三十七世泰山任超和尚が「宝暦版經」の開版に至る事由を述べた左記の刊記にみられる記述に着目して、その説明を行うこととする（訓読は筆者）。

江府寂紫居士、深ク金經ヲ信ジ、在世ノ刻本多シ。今、此ノ版ハ、居士ノ末後ノ改本ヲ求メ来リテ書写シ、以テ刊行ス。傍註・訓点等ハスベテ除去シ、タダ其ノ本文ノミヲ取り用フ。総陀羅尼ハ覺彦密師ノ漢字本ニ拠リ、仮

名・句読共ニ一々コレヲ訂正スルトコロナリ。

これによれば、「宝暦版経」は、「江府寂紫居士」と称する居士の本に依拠し、当初付されていた傍注や訓点などを除き、陀羅尼のみそれを音写した「覚彦密師」の漢字本に依拠し、仮名・句読点などに一々に手を入れて刊行されたものであることが知られる。ここに陀羅尼に通じた覚彦と称される密師とは、江戸湯島の霊雲寺を開いた新安流の流祖、浄厳和尚であることは明らかで、新安流聖教の伝来がある金剛院にも、関連の聖教や仏像などが数多く収蔵されている。研究に着手した当初は、当該の「宝暦版経」の原となる本についての手がかりは皆無であったが、継続的に行う金剛院の悉皆調査のなかで、いま一つ、経旨絵としての扉絵の「変相図」と「仮名訓」の著しい、浄厳の関わりが認められる「霊雲寺蔵版」の『最勝王経』があつたことに思い至つた。同経をあらためて披き見ると、その刊記に刻まれた識語から、それが「江府寂紫居士」なる人物が願主の、まさに「宝暦版経」の原となる正徳三年（一七二三）の版経であることが判明した。金剛院の経蔵に双方の版経が収められていたことは、同寺の江戸期学僧の聖教蒐集の篤きことを思えば宣なるかな（後述）、聖教の所蔵とその相承の遺志に思いを致しながら調査に臨むことを心に刻む機会となった。かような経緯のもと、小稿は、禅宗の總持寺祖院や真言宗の慈高山金剛院に所蔵される「宝暦版経」の開版の契機となり、信仰の原点となった「正徳版経」に遡り、その新たに見いだされた同経の実態を明らかにすべく、書誌的な紹介と、開版の経緯を少しく考究するものである。

一、書誌

ここに、今後「正徳三年」版経の本文紹介を行うことを念頭に、まずはその解題として、書誌学的な知見をもって当該版経を分析し、概観しておくこととしたい。十冊一結の内、紙数の便宜から第十巻を中心に記述し、別の巻については要に応じて記す。

〔外題〕 題簽題。「金光明最勝王經 十」。

紺紙金字。上方に如意宝珠の挿絵あり。その上に横書きで「等會乘典」とあり。中央大字「金光明最勝王經」とあり、右傍書細字「金光明妙法最勝諸經王」／左傍書細字「甚深難得聞諸佛之境界」三行蓮台に乗る。双郭（外金太・内金細）。

〔内題〕 金光明最勝王經卷第十。

*冒頭、内題前の巻序に「品目」を記し、各品の文字数を記す。悉曇がある品は、文字数の内訳に表記あり。さらに「編目」と総文字数を記す。他品の内題は、文字数の表記とともに後述。

〔尾題〕 ④金光明最勝王經卷第十。

*本文の最終行下方に、「四天王護國品終」とあり。

*尾題後方に、巻内文字数についての表記あり。後述。

〔体裁〕 版本（木版摺り）。

〔表紙・裏表紙〕 縹色紙に紺の華唐草文。厚手の経木に包み表紙。

〔装丁〕 折帖。

〔頁数〕 十冊。巻一から巻十。

〔丁数〕 巻第一―六十七折 巻第二―五十五折 巻第三―四十八折 巻第四―五十二折 巻第五―四十八折 巻第六―六十三折 巻第七―五十八折 巻第八―五十五折 巻第九―六十九折 巻第十―七十三折 総丁数、五百八十八折

〔丁内行数〕 一面（半丁）五行。 *細字二行分ち書きあり。

〔行内字数〕 十三字。

〔法量〕 縦一三〇・三糎。横一二・五糎。

〔界線〕 墨界。天地二重界線（外太・内細）。天頭三・七糎、本文二五・五糎、地脚一・二糎。界幅一二・四糎、柱幅左右各一〇・三糎。

〔藏書印〕 卷第一の卷末に「東都靈雲藏／版大許翻刻」朱方印一顆

*前後左右、陰刻と陽刻の市松様に、右―陽陰陽陰陽、左―陰陽陰陽陰

卷第十の卷末に「同右」朱方印一顆、その他の巻には同墨方印一顆

〔小口書〕 版本の下部に墨書の小口書あり。

卷第一から卷第十まで順に、右方から左方へ「一金檀」「二金戒」「三金忍」「四金進」「五金禪」「六金恵」「七金方」「八金願」「九金力」「十金智」と明記される。

〔訓点〕 有。墨。仮名訓（片仮名）。声点。連続符。字間の豎点。区切り点。雁金（レ）点、一二点、上中下点等あり。

要語においては文字の右傍に音読、左傍に訓読の片仮名が示される。総仮名（ルビ）と訓点により、徹底的に經典の訓読が促される。また、時に語釈も含む。時に頭注に異本校合あり。

〔収納〕 経棚（蓋付）に『法華経』版経と共に収納。「宝曆版経」とは別置。

〔保存状態〕 原装。虫損。

〔刊記〕 「付嘱品終

Ⓐ金光明最勝王經卷第十終

△是十之卷文字之數

六千七百三十九字

④金經一部十卷三十一品本文總字數

都合六萬三千七百十五字終

内梵文數二千四百四十一字
漢字數六萬二千二百七十四字也

正徳元平年八月十二巳日大吉祥日

願主 直治寂紫子

〔方印〕二顆

漢土朝鮮日域所傳之義淨翻譯

金經乎異本及諸註疏最不_レ少予

参季積_レ之_レ已盈_レ庫漸参_三考之_一今得_二

是全經_一庶者高勘士尚俟_三其訂正_一

金光感應 諸善奉行 衆惡莫作 法師位

勸善懲惡 滅惡生善

(中略)

南無日本宗廟兩太神宮六十餘州大

小神祇等及本生國姓神本命星當年

星國家鎮守等△各飽希有法味倍增

威光而本地誓願速成就以金經遍廣

行流布行者所願盡如意滿足故我捻香作禮

正徳三癸巳年正月十一日己丑摩訶吉祥日

陀羅尼梵音 覺彦和尚

和訓之點者 天仙和尚

變相之圖繪 黒川元壽齋

眞字之筆執 辻柳陰齋

片假字筆執 遠山孝生齋

願主 直治寂紫子

〔方印〕二顆

金光明最勝王經_{広行}守護

朱方印一顆 「東都湯嶋_{御経師} 日下莊兵衛」 *木記(墨・双郭)

*第七卷の裏表紙見返にも右の木記あり(朱方印無)。

〔巻序・巻末〕

各巻の巻序には、『最勝王經』の經内総字数を割り出す文字数が、漢字・梵字別に挙げられている。当該版經の開版の意図に一字一字の文字を重視する思想があることから、各巻内字数を明記する。翻刻にあたり旧字体表記は新字体に改め、行送りの箇所「」を入れて略述した。

巻第一(巻頭)

「金光明最勝王經巻第一／品目／序品第一／是品文字数千八百五十七字／如来寿命品第二／是品文字四千六百二十四字／是巻編目乎二品矣／文字数都合六千四百八十一字也／但除大唐三藏法師義浄奉制訳之十有一字也」

(尾題已下)「金光明最勝王經巻第一終／是一之巻文字之数／六千四百八十一字」

巻第二(巻頭)

「金光明最勝王經巻第二／品目／分別三身品第三／是品文字三千八百八字／夢見金鼓懺悔品第四／是品文字二千七百九十六字／是巻編目乎二品矣／文字数都合六千六百四字也／但除大唐三

藏法師義淨奉制訳之十有一字」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第二終」

卷第三（卷頭）「金光明最勝王經卷第三／品目／滅業障品第五／是卷編目乎一品矣／文字数都合五千五百六十一字也／但除義淨名字等十一字也」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經第三卷／是三之卷文字之数／五千五百六十一字」

卷第四（卷頭）「金光明最勝王經卷第四／品目／最淨地陀羅尼品第六／是卷編目乎一品矣／文字数字都合五千七百六字也／内梵文四百三十七字
漢字五千二百六十九字也／但除義淨名字等十一字」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第四終／是四之卷文字之数／五千七百六字也／内梵文四百三十七字
漢字五千二百六十九字」

卷第五（卷頭）「金光明最勝王經卷第五／品目／蓮華論讚品第七／是品文字数千四百四十九字／金勝陀羅尼品第八／是品文字数八百二十四字／内梵文二十八字
漢字七百九十六字也／重顯空性品第九／是品文字数三千三十二字／依空滿

願品第十／是品文字数二千五百三十二字／是卷編目乎四品矣／文字数都合五千五百三十七字也／但除義淨名字等十一字」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第五終／是五之卷文字之数／五千五百三十七字／内梵文二十八字
漢字五千四百八十九字」

卷第六（卷頭）「金光明最勝王經卷第六／品目／四天王觀察人天品第十一／是品文字数七百三十七字／四天王護国品第十二／是品文字数字六千七百十九字／内梵文三百八十二字
漢字六千三百三十七字也／是卷編目乎矣／文字数都合七千

四百五十六字也／但除義淨名字等十一字」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第六終／是六之卷文字之数／七千四百五十六字／内但義淨註文總字
除二百一十四字
梵文三百八十二字
漢字七千七十四字」

卷第七（卷頭）「金光明最勝王經卷第七／品目／品第／是品文字数字／品第／是品文字数字／是卷編目乎矣／文字数都合字也／但除大唐三藏法師義淨奉制訳之十有一字也」

〔尾題已下〕「是七之卷総文字数／六千五百字／但除於義浄註文細字並称人名願等字／内梵文千八百五十五字」

卷第八（巻頭）

「金光明最勝王經卷第八／品目／大吉祥天女品第十六／是品文字数五百六十五字／大吉祥天女增長財物品第十七／是品文字数九百四十九字／内梵文九百七十七字也／堅牢地神品第十八／是品文字数

千四百二十三字／内梵文八十一字也／僧慎爾耶葉叉大将品第十九／是品文字数九百八十七字／内

梵文百二十八字

漢字八百五十九字也／王法正論品二十／是品文字数七百九十六字／是卷編目乎五品矣／文字数都合五

千七百二十字也／但除義浄名字等十一字」

卷第九（巻頭）

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第八終／是八之卷文字之数／五千七百二十字／内梵文三百六十六字」

「金光明最勝王經卷第九／品目／善生王品第二十一／是品文字数九百八十七字／諸天藥叉護持品第二

十二／是品文字数千七百五十五字／授記品第二十三／是品文字数七百六十六字／除病品第二十四／

是品文字数千四百十二字／長者子流水品第二十五／是品文字数二千五百十一字／内梵文二百三十三字也

／是卷編目乎五品矣／文字数都合七千四百三十一字也／但除義浄名字等十一字」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第九終／是九之卷文字之数／七千四百三十一字／内梵文二百三十三字」

「金光明最勝王經卷第十／品目／捨身品第二十六／是品文字数四千九百九十字／十方菩薩讚歎品第二

十七／是品文字数四百二十五字／妙幢菩薩讚歎品第二十八／是品文字数三百三十二字／菩提樹神讚歎

品第二十九／是品文字数四百十五字／大弁才天女讚歎品第三十／是品文字数三百七十七字／付属品第

三十一／是品文字数千九百九十字／是卷編目乎六品矣／文字数都合六千七百三十九字也／但除義浄名

字等十一字」

〔尾題已下〕「金光明最勝王經卷第十終／是十之卷文字之数／六千七百三十九字／金經一部十卷三十一品本文

總字数／都合六萬三千七百十五字終／内梵文数二千四百四十一字也」

*六十三折裏以下に「奥書識語」が続く

〔裝飾〕 卷一冒頭に「変相の図絵」が五図あり。

・④「金光明最勝王經平等大會序品列衆」と題す靈鷲山釈迦說法図」六折分

・右「在王舍大城鷲峯山頂釋迦牟尼佛」、左「金光明最勝王經說法大會」一折分。

・右「大唐則天順聖皇帝嗣聖十七年十月制於三藏沙門義淨」、左「令譯金光明最勝王經。廻一部十卷三十一品ノ金經。此也」一折分。

・右「金光明最勝王經供養壇」、左「諸尊擁護拜行者勤修相」一折分。

・『金光明最勝王經』の経題の「義淨翻譯出梵本也」の【梵字】・梵音（右傍に片仮名訓）・漢字（右下に細字）を右方に、『弘法大師出開題也』の【梵字】・梵音（右傍に片仮名訓）・漢字（右下に細字）を左方にし
て並列、半折分。

「蓮台に乗る『金光明最勝王經』の経題」半折分。左右の半折で一对。

また、各巻、項目ごとの見出し点にあたるものとして、冒頭（天界部）に、宝珠に「大」の字の図絵点あり。
経の段ごとに天界線上に△内に三辨宝珠の図絵点あり。

〔曼荼羅〕 全三十八幅 *複数の陀羅尼を掲げる場合にのみ、幅数の右に私に傍線を付した。

巻第一 序品第一―是品曼陀羅一幅而全（以下、一幅で同じ記述の場合、一幅と略述）如来寿量品第二―一幅

巻第二 分別三身品第三―一幅 夢見金鼓懺悔品第四―一幅

巻第三 滅業障品第五―一幅

巻第四 最淨地陀羅尼品第六―一幅

巻第五 蓮華論讚品第七―一幅 金勝陀羅尼品第八―一幅 重顕空性品第九―一幅 依空 満願品第十一幅

卷第六 四天王觀察人天品第十一幅 四天王護國品第十二幅品曼陀羅四幅而全

卷第七 無染著陀羅尼品第十三幅 如意宝珠品第十四幅 大辨才天女品第十五幅品曼陀羅四幅而全

卷第八 大吉祥天女品第十六幅 大吉祥天女增長財物品第十七幅品曼陀羅二幅而全 堅牢地神品第十八幅

僧慎爾耶藥叉大将品第十九幅 王法正法論品第二十幅品曼陀羅二幅而全

卷第九 善生王品第二十一幅 諸天藥叉護持品第二十二幅 授記品第二十三幅 除病品第二十四幅品

曼陀羅合除病品二幅而全 長者流水品第二十五幅品曼陀羅合除病品二幅而全

卷第十 捨身品第二十六幅品曼陀羅二幅而全 十方菩薩讚歎品第二十七幅以下諸讚歎品及付囑品等曼陀羅合

成一幅而全 妙幢菩薩讚歎品第二十八幅(無記) 菩提樹神讚歎品第二十九幅(無記) 弁才天女讚歎品第

三十幅(無記) 付囑品第三十一幅(無記)

〔陀羅尼〕 全三十五呪。刊記に「梵音陀羅尼」と記されるように、漢訳で音写された漢字表記の陀羅尼が梵字で表

記され、右傍に片仮名訓が付される。各々の陀羅尼の前に「呪」を促すことばと、末尾に「呪」に伴う所作を示すことばが片仮名で記される。

卷第四 最淨地陀羅尼品第六十呪

卷第五 金勝陀羅尼品第八一呪

卷第六 四天王護國品第十二四呪

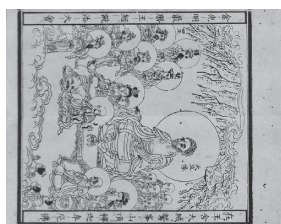
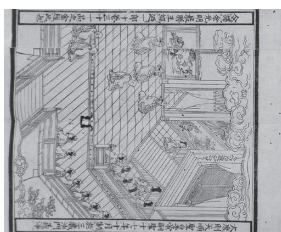
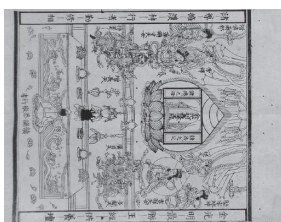
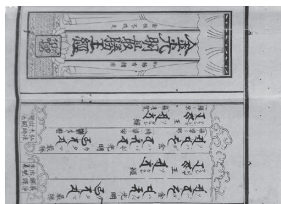
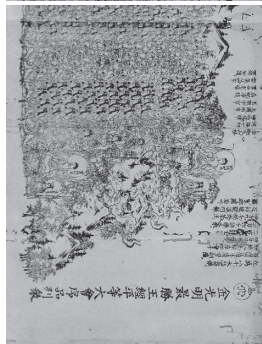
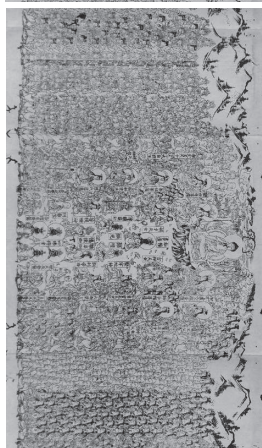
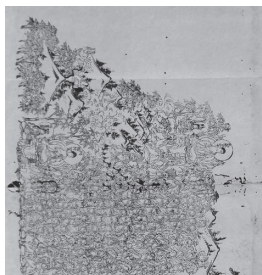
卷第七 無染著陀羅尼品第十三一呪如意宝珠品第十四七呪

卷第八 大弁才天女品第十五之一五呪大吉祥天女增長財物品第十七一呪堅牢地神品第十八三呪僧慎爾耶藥

叉大将品第十九一呪

卷第九 長者流水品第二十五二呪

慈高山金剛院藏『金光明最勝王經』江戸時代・正徳三年（一七一三）開版
表紙、巻第一扉絵「麥相図」、巻第七「四天王護国品」（冒頭・部分）、巻第十末尾（刊記・部分）



二、井伊直治願経としての『最勝王経』

さて、右の書誌に明らかかなように、「正徳版経」第十卷には次のような刊記が認められる。

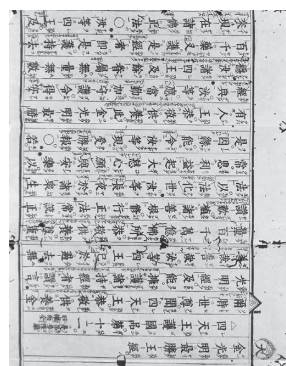
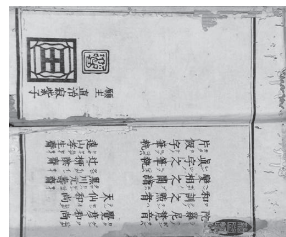
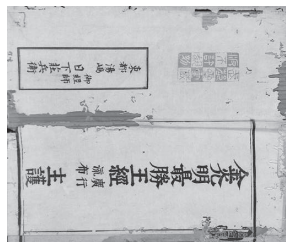
正徳元^辛卯年八月十二^己大吉祥日／願主 直治寂紫子

この正徳元年（一七一二）の開版を請願した時を示す識語と、左記の刊行が成った正徳三年（一七二三）の両識語により、同経は「直治寂紫子」が願主であったことが知られる。

正徳三^癸巳年正月十一日^己丑摩訶吉祥日、陀羅尼梵音覺彦和尚、和訓之点者天仙和尚、交相之図繪

黒川元壽齋、真字之筆執辻柳陰齋、片仮字筆執遠山孝生齋、願主直治寂紫子

この「正徳版経」の願主である「直治寂紫子」と、秋葉蔵版の「宝暦版経」の識語にみられる「江府寂紫子」が同一人物と考えてよいことは、「寂紫子」の名が一致するほかに、「宝暦版経」に「総陀羅尼ハ覺彦密師ノ漢字本ニ拠ル」とあり、「正徳版経」の刊記にも「陀羅尼梵音 覺彦和尚」とあることによって、確かなことである。『金光明経』



に厚い信仰を寄せ、浄厳に開版事業を依頼し得た「寂紫子」という、この願主とはいったい如何なる人物であるのか。そのことを解く次のような記録を秋葉蔵版の「宝暦版経」に關連する秋葉山の資料、安永六年（一七七七）の『正一位秋葉山大権現略縁起』に拾うことができる。

一、神前銅鳥居 近江彦根城主
井伊掃部頭直孝建立

秋葉正一位大権現額

（中略）

一、犬居坂下へ 五十丁

銅鳥居 井伊掃部頭直孝建立

再建立有井伊直治と有之

町石朱 ニ而 金字有 右同断

金光明最勝玉經 流布檀主井伊直治

一ヶ年ニ二百部宛之秋葉山より出上卷_ニあり

右は秋葉山神前の銅の鳥居を近江彦根藩主井伊直孝が建立したという記録であるが、その再建者としてそこに井伊直治の名が見いだされ、さらにその直治が檀主として『最勝玉經』が流布し、一か年に二百部が秋葉山から上梓されたことが記されている。これにより、「宝暦版経」の「江府寂紫子居士」の「江府」は近江を示し、彦根藩の藩主が秋葉山との関わりを持っていたことが確認される。彦根藩主井伊家の歴代は左記の通りで、

初代直政—二代直孝—三代直澄—四代直興（直治）—五代直通—六代直恒—直該（直治再封）

鳥居を建立した井伊直孝（一五九〇—一六五九）は二代藩主であり、当該の直治は直孝の四男直時の嫡男で、三代直澄の養子となって四代藩主を継いだ。右の建立記録の背景に、井伊家の秋葉信仰や、直孝の武運長久と秋葉権現の守護

などがあることが想定され、直孝の代に建立された鳥居を、その孫の直治が修復している。直孝は駿河国志太郡藤枝（静岡県藤枝市）生まれで、同地には遠州秋葉寺を筆頭に、駿河清水に秋葉山峰本院・栄松院・福昌院が所在している。そもそも井伊家の発祥は遠江国引佐郡井伊谷（静岡県浜松市北区引佐町井伊谷）で、祖を藤原良門流とし、平安時代の在庁官人として代々井伊介を称し、藤原共資の子である共保が井伊谷に住んだことで井伊氏を称したとされる。徳川将軍家の先鋒であり、また京都守護として、文武両道を伝統とする家柄であった。

当該の直治公（一六五六—一七一七）は、近江国第四代彦根藩主で中興の英主といわれ、玄蕃頭、掃部頭を歴任し、大老として徳川五代将軍綱吉および六代将軍家宣に仕えた。玄蕃寮（げんぱりょう）（ほうししまらひとのかき）は治部省に属し、仏寺や僧尼の名籍、外国使節の接待・送迎を司る役所（鴻臚寺）であり、その職員の筆頭にあたる玄蕃頭に直治が就いていたことは、その私的な経典開版という事業を考える上でも看過し得ないことである。幕府から日光東照宮修造の総奉行を命ぜられてこれを勤め、またその経験を生かして領内彦根城の鬼門に建立した大洞弁天堂が知られる。幼名吉十郎から直興（なほむき）→直治（なほり）→直興と四度の改名を重ねており、直治の名は元禄十四年（一七〇一）時にあたる。大老を辞して剃髪し覚翁軒と号したが、再び養髪して二度目の大老の職に就き、後にこれを辞して彦根に退き、再入道して全翁と号した。六十二歳で逝去、法名は「長寿院覚翁知性大居士」、遺言により永源寺（滋賀県愛知郡）を菩提所とした。

「寂紫子」という号については、その由来を明かす記録を見いだすことはできないが、釈尊の異名に「寂業師子（じやくごうし）」があり、仏の教えを信ずる仏弟子を「仏子」というのにちなみ、釈迦を示す「釈氏（しゃくし）」をもじり、その弟子の意であるか。直治は出家して仏道に入ったことから、「仏弟子である直治」の意かと推定される。仏教語において「寂」は「涅槃」の異名、「紫」は、仏国土を表わす「紫磨」や仏の尊容を表わす「紫磨金色（しまこんじき）」、香木の「紫檀」、法印に許される「紫衣」の禁色など、尊貴な語とされる。阿弥陀如来が往生人を迎える際に乗り来たる「紫雲」、西方極楽のイメージも与えられていたと思われる。官職を離れ、仏道に勤しむ自らの号として愛着をもって

いたと想像されるのは、改名を繰り返した人生の中の「直治」という名に冠しているところにもうかがえる。

その「直治」への改名は、病気がちであった直興が大老職を辞し、子息直通に家督を譲り、彦根に帰って養生に努めた時の名である。「直」には「なほる」「なほす」の意があり、元通りになるという意から、「病気が直る」などと記される。また、「治」も異字同訓で、「おさめる」「なほす」「なほる」の意があり、「手を加えて病気を治す」などといわれる。後に再び大老職に就いた時も、「多病たるにより、公務の時は宥恕あるべきのあひだ、保養をくはへ、ころよきときは、出仕すべきむねの恩命をかうふる」(『寛政重修諸家譜』)との配慮がなされ、病身を押しての出仕に興杖の特権が許されていたという。そうした直興が彦根に戻って隠居し、病と向き合う養生の時に臨んで「直に治る(じきになおる)」との願意を込めた命名であったかと思われる。後に相次ぐ我が子(五代直通・六代直恒)の早逝により、養髪して再び藩主となり、將軍の命によって大老職に帰せざるを得ない運命を、「そうせねばならない、順番・理屈にあたってゐる」という意を含む「該」の字を用いた「直該(なおもり)」と改名したことや、晩年、七代藩主(直惟)が誕生し、彦根に戻って還暦に再入道した際、晴れて「全翁」と名乗ったことなど、折々の命名の仕方に照らすことによって推し量られる。

その生涯のなかで、「正徳版経」開版の志を立てた正徳元年八月は、直治が大老職への復帰(同二月十三日)で再び江戸での職務にあたっていた時期にあたり、版経が上梓された正徳三年正月は、翌四年に藩主の座を譲り彦根に戻る(同二月廿三日)前にあたることから、その開版から上梓までを、大老として過ごした江戸在任期に比定することができ(8)る。この間のこととして、「二年五月朔日またやまひにあるのよしきこしめされ、こゝろに任せて出仕すべき旨おほせあり」、「九月十三日直該がやまひをとせたまふ」、「八月七日直該やまひを療せむがため、塔沢の温泉に浴するに……かの地におもむくとき、侍医栗崎道有を添らる」(『寛政重修諸家譜』)などという記事が散見される。『井伊家譜』をはじめとする公的記録のなかに、直治が当該の經典開版の願主となったことを見いだすことはできないが、經典の(9)

刊行に臨み、あえて「直治」に「寂紫子」を冠した心のうちが、その生涯からうかがえる。

その正徳元年から正徳三年の間の直治と版経のことは如何にしてあったのか。そのことが刊記に次のように記されている。

漢土・朝鮮・日域ニ伝フル所ノ義浄翻訳ノ金経、異本及諸註疏最モ少カラズ。予、参季コレヲ積ミテ、已デニ庫ニ盈ツ。漸クコレヲ参考シ、今是ノ全経ヲ得タリ。コイネガハクハ高勘ノ士、尚其ノ訂正ヲ俟ツ。

開版の願意を立ててから三年の間、中国・朝鮮・日本の三国に伝来する義浄訳の金経（最勝王経）の異本や註疏類の数を蒐集し、各々を照らし合わせて研究を行い、今この完全なる経を得たとして、願わくは高勘の士にさらなる訂正を俟ちたいとのことばを添え、上梓の言としている。開版に携わった浄嚴以下の諸師と願主の署名の後には、「金光明最勝王経（広行）流布主護」とあり、その二年半余りの歳月を諸本研究に費やしての刊行は、『最勝王経』が遍く「（広行）流布」せんことを願うものであると刻されている。

最末の裏表紙見返しに、巻第一と巻第十の巻末に捺せられた「東都靈雲蔵／版大許翻刻」という朱方印、および巻第十の方印下に「東都湯嶋（御経師）日下莊兵衛」とあることから、「正徳版経」は浄嚴が開基した江戸湯島の「靈雲寺蔵版」で、同地の日下莊兵衛を経師とし、梵字による真言陀羅尼を浄嚴和尚（覺彦）の字記に定め、版下の和訓の点は天仙和尚、変相図絵は黒川元壽齋、漢字筆執は辻柳陰齋、片仮名筆執は遠山孝生齋をそれぞれ分担とする版経の一大制作事業であったと知られる。

ところで、直治には、その『最勝王経』に対する思い入れを知る上で、いま一つの同経に関する刊行が認められる。『金光明最勝王経略縁起并大金光明最勝王経供養行軌』（以下『金光明略縁起并供養行軌』と略述）と称する版本で、刊記に「願主寂紫子直治識」とあり、寛政二年（一七九〇）に大坂浪華高麗橋の浅野弥兵衛により刊行されたことが知られる。刊行は直治示寂後から七十有余年の歳月を経ているが、この書肆からの刊行に先行する写本もしくは版本の存

在なども想定される。前半は『最勝王經』の教学史を入れた「略縁起」、後半は具体的な供養の作法次第等を示す「供養儀軌」から成り、一冊に合冊される。いわゆる仮名法語に類する仮名書き本で、「正徳版經」がめざすところの『最勝王經』の広宣流布を平易に示して信仰の実践を促す書であり、同版經と相互に読み込むことで明らかとなることも多い。

以上、「正徳版經」の考究のため、併せて検討の資としたい。次節では、「正徳版經」の特徴を具体的に概観しながら、直治がめざした版經とは如何なるものであったかを、見つけてゆきたい。

以下に、『金光明略縁起并供養行軌』の凡その書誌を附す。

【書誌】

〔外題〕 金光明最勝王經略縁起。

* 後補の書き題簽

元題簽は「金光明最勝王經略縁起略縁起供養儀軌」（摺題簽）と別本で確認

「大金光明最勝王經略縁起」と「大金光明最勝王經供養行軌」との合冊

〔内題〕 大金光明最勝王經略縁起／大金光明最勝王經供養儀軌。

〔尾題〕 大金光明最勝王經略縁起畢／大金光明最勝王經供養儀軌畢。

〔体裁〕 版本（木版摺り）。

〔頁数〕 一冊。

〔装丁〕 袋綴装。四ツ目綴。

〔丁数〕 「大金光明最勝王經略縁起」一七丁。「大金光明最勝王經供養儀軌」四〇丁。

〔丁内行数〕 半丁一面十行。

〔法量〕 縦一・二五・八糎。横一・八・三糎。

〔界線〕 匡郭(单边)、墨。縦一・天頭三・三糎、本文二・一・八糎、地脚〇・七糎。横一・柱より、〇・八糎、一・五・四糎、〇・七糎。界幅一・一・五糎。

〔奥書識語〕 「願主／寂紫子直治識」〔方印〕二顆

「(中央) 正了知大將図(上) 守護(右) 正了知大將(左) 秋葉大權現(下) 白井權現」

「(中央) 城井氏藏版」〔方印〕二顆

「(右) 寛政貳年歳次(左) 庚戌冬十式月」

「經師 京都寺町五條上町 高木藤兵衛

書林 同所 中野宗左衛門

東都本石町十軒店 山寄金兵衛

浪華高麗橋壹町目 淺野弥兵衛

〔備考〕 後方に合冊された「供養儀軌」の項目を挙げる。

御經讀誦作法／金勝陀羅尼法先佛菩薩の名を唱へ次に陀羅尼を誦すべし／無染著陀羅尼法／舍利禮文／四方電王名號／如意寶珠陀

羅尼法／補闕分大金剛輪陀羅尼法軍荼利儀軌に出たり／御經守護佛天等總號／首題問答決疑／諸尊の加護を請ふべき

事／諸尊の恩徳を報すべき事／一切衆生の恩徳を報すべき事／行者信心を妨くべからざるの用心／

三、本經の特徴(一) 読誦經典——訓読

「正徳版經」の最たる特徴は、『最勝王經』の本文の全ての文字に徹底して片仮名の総仮名で訓を付す(総ルビ)とい

う表記法にある。^①それは漢字のみならず、義浄が訳経にあたつて梵本の陀羅尼を音写した漢字を、再び梵本に帰すべく梵字を当て直し、さらにその梵字の読み(音)としての仮名訓を付している点にもある。これを刊記では、「陀羅尼梵音」と称している(以下、梵字に仮名訓を付した陀羅尼について用いる)。

たとえば、各巻冒頭の経題の下に記される訳経者について、「大唐三藏法師義浄奉 制譯」とあり、「奉 制譯」の表記の右傍に「ウケタマハツテ、ミコトノリヲヤクシ上ツル」と仮名訓が付されるが、一方の左傍には「ウケタマハツテ、チヨクメイヲ、テンジクノモンジヨコトバヲシテ、モロコシノモンジヨコトバニエラミテヨミカヘ上ツル」という語義が展開される。この語義は、義浄が勅命によって天竺(印度)のことは唐土(中国)のことは精選して翻訳したという訳経の経緯を平易に伝えるものであるが、こうした右傍に訓読の仮名訓、左傍に語の意味を示すという、いわゆる要語注釈が仮名によってなされることで、「正徳版経」は漢訳仏典としての漢語による本文提示の上に、さらに日本語に即した經典の解釈を促すものといえる。

これに相反して「宝暦版経」の刊記には、正徳版を底本とするも、「総陀羅尼ハ覚彦密師ノ漢字本ニ拠ル」として、陀羅尼は漢字で記された本を採用したことを表わし、また「傍註・訓点等ハスベテ除去シ、タダ其ノ本文ノミヲ取リ用フ」として、正徳版の繋難な仮名訓を一折に数か所程度の要所の右訓・左訓に留め、新たに訓点・声点を付し、陀羅尼のみ総仮名を付すというかたちに改めたことが記されている。こうした「宝暦版経」の独創が逆に「正徳版経」の特徴を明かにする。仮名訓は正徳版が訓読のために付されているのに対し、宝暦版は音読のためにそれが付されている。また陀羅尼の末尾や巻末に音釈(字句に関する発音・語意の一覧)や校譌(校異)を付したり、装丁は全丁綺羅引きの料紙で経文の余白に蓮華弁の宝尽が施される装飾経へと転じたりするなど、任超の宝暦版開版に臨む意識に照らすことで、正徳・宝暦両版経双方の優れた特徴が浮き彫りとなる。

そうした一見して繋難ともいえる仮名訓の表記について、そのすべての事例を小稿で言及することはできないが、

ここに江戸湯島の靈雲寺から刊行された「正徳版經」の特徴を明らかにするべく、主たる記述の有り方について、以下に少しく例を挙げておくこととしたい。

まず「濁音」であるが、濁音符（濁点）を付すかたちで表記される。「拗音」については、たとえば「金光明最勝王經卷第十」という場合、「や」「ゆ」「よ」「わ」「ふ」の右に傍線を付して「コンクワウミヤウサイショウワウギヤウダイジフ」のごとくに記される。「促音」については、たとえば「奉^レ制」の場合、「促音」の「ツ」の右に傍線を付して、「ミコトノリヲウケタマハツテ」のごとくに記される。

右訓においても、たとえば「曰」を「ノ玉ハク」と訓じたり、「者」を「ヒトは」と訓じたりするなど、意味を解した上での和訓が諸々に散見される。そうした訓みについては、右訓にとどまらず要所に左訓も施されており、たとえば「爾時」の場合、右は「ソノトキ」と訓じ、左には「シカツシトキ」、「演説」の場合には、右に「エンゼツシテ」と訓じ、左に「ノベトキ玉ヒテ」と、左に第二の訓じ方が併記されるなどというように、幾通りもの言い換えのバリエーションも提示される。

稀に訓み方についての仔細な指示をも含み、たとえば、「成就」の語の右に「ジャウジュスルコトヲ」と付し、左に「ジャウジュセシムルコトヲ」という文法的な違いをも示すようなことも見受けられる。

また、本文の左には、左注として語意が説示されることもあり、經典の音読のみならず、經文の意を汲みつつ、読誦がすすめられるように仕組まれている。

本文には諸種の訓点が版刻され、「^レ（雁点）」、「一・二・三・四点」、「上・中・下点」、「甲・乙点」などに加え、字間の縦点が中央、左に連続符が施されている。また、読点にあたる位置に白点が認められ、会話体もしくは引用（「」に相当）などの際には、始点として右上に黒点を付し、終点として左下に黒点を付すなどの訓点も見いだせる。

加えて、改行が施される大段落の箇所には、上覧に三辨の宝珠を内包する△の装丁見出しが二重天界上に、小段落

的な区切りには「白点大」が付されており、後述する懸け幅の「曼荼羅」の存在とともに、当該經典が訓読による読誦を前提に、經文の内容的理解を促すように重点を置いて編纂されたものであることが明らかである。それは、經典の訓読のあり方という、仏教學的にも、また国語学的にも研究に資する観点を多分に内包した、江戸期の学問的な粹を鏤めた版經として評価し得よう。

加えて、經内字数についての表記が各巻の巻頭、本文を開く經題の前に厳密になされていることも本經刊行の意を表す重要な特徴であり、經典の文献学的研究にも資することから、繫雜をかえりみず、書誌に各巻の記述を記しておくことにした。ここでは、最末巻である巻第十の末尾に記された『最勝王經』の総文字数についての表記を、仮名訓とともに引く。

金光明最勝王經卷第十終／是十之卷文字之數／六千七百三十九字／金經一部十卷三十一品本文總字
数都合六萬三千七百十五字終／内梵文數一千四百四十一字漢字數六萬二千二百七十四字也

これは梵漢にわたる字数を、各品から各巻へ、そして十巻全ての総字数へと積算して示す表記であるが、各巻の巻頭の經内字数の末尾には、「但除義淨名字等十一字」という、訳經に関する記述を除く記載が加えられており、『最勝王經』の一字一字の文字に対する崇敬を、厳密なまでに示そうとする意を汲むことができる。

文字数に関する表記を細かく拾うなかで、平安時代の末に、時の法皇であつた後白河院が御撰の歌謡集を編纂し、そのうちの「法文歌」と称する仏教系の歌謡について遺した「法文の歌、聖教の文に離れたる事無し。法華經八巻が軸々、光を放ち放ち、廿八品の一々の文字金色の仏にまします。世俗文字の業、翻して讚仏乗の因、などか転法輪にならざらむ」(『梁塵秘抄口伝集』)という口伝のことが想起される。それは「謡う」ことによる音声の功德を經典読誦に准えたことであるが、まさに当該の『最勝王經』に文字の数が一一に書き上げられているのは、本文を「読誦」し、陀羅尼を「呪」すことが、「法輪を転ずる」ことへと繋がる功德そのものにほかならないことを示しているよう。

四、本經の特徴(その二)——「変相図」、「曼陀羅」、「真言陀羅尼」

書誌に示すごとく、巻第一の冒頭に扉絵として五つの「変相図」が掲げられている。各図絵について仮称すれば、第一図は「靈鷲山釈迦金光明最勝王經說法大会并列衆図」。第二図は「釈迦說法大会図」、第三図は「則天武后奉制訳義浄三藏金光明最勝王經訳経図」。第四図は「金光明最勝王經供養壇図」。第五図は「金光明最勝王梵字入経題図」である。この後方に、巻序にあたる経内文字数が掲げられ、内題が続き、本文となる。以下に各変相図について粗述する。

第一図の冒頭には、見出しに「宝珠」をあしらって「金光明最勝王經平等大会序品列衆」と記され、靈鷲山右肩上方に、靈山界会に参集した諸衆について左記のごとく記述される。

九万八千、大苾芻衆。／百千万億、菩薩摩訶薩。／五億八千、梨車毘童子。／四万二千、天子。／二万八千、龍王。／三万六千、諸藥叉衆。／四万九千、揭路荼王。／及餘健闥婆。阿蘇／羅。緊那羅莫呼／洛伽。及。山林／河海。一切、神仙。及。諸／大國、所有／王衆。中宮／后妃。淨信、／男女。悉皆／雲集。及。四方、／四仏加護。

絵図に目を転じれば、経の記すところの王舎城靈鷲山において仏陀が右邊三匝の礼拝を受けた各衆が描かれており、中央の釈迦如来に向かつて脇左方に觀世音菩薩善住菩薩・金剛秘密主・慈氏菩薩が、右方に虚空藏菩薩・師子相菩薩・如意宝光天女・大迦葉が座す。また釈迦に対面するかたちで妙童菩薩が座し、その後ろに銀幢・銀光・梨車毘・憍陳如の四仏侍者が続く。妙童菩薩の左手には弁才天女・僧慎爾耶(藥叉大将)・菩提樹神が、右手には吉祥天女・堅牢地神・訶利底母神が座す。中央手前の四仏侍者の左方に阿難陀・帝釈天及眷属、右方には舍利子・梵天及眷属、その外側左方に広目天及眷属・多聞天及眷属、右方に增長天及眷属・持国天及眷属が座している。さらに視線を図面の左右に広げれば、右方に東方阿閼如来・南方宝相如来、左方に北方天鼓音如来・西方阿弥陀如来の大会を包む四方四仏が

各々侍者菩薩を伴つて蓮華座に在す姿が描かれている。

『最勝王經』の序品において、仏陀は最勝王經の威力を説くのであるが、その説法の庭に經文に語られた諸衆が雲集する様を余さず描く壯觀な變相図である。こうした金光明の妙法聽聞の世界觀を表わす絵図については、東アジアの經絵の研究から須藤弘敏氏に中国の版經扉絵に北宋の端拱元年（九八八）刊行の「金光明經」（蘇州博物館所藏）に精細な變相図が付されていることについての指摘がある。¹³ 緻密なその図様には明らかに中国の仏教版画の扉絵の著しい発展の影響が考えられるが、印象的には明代の永樂南藏における扉絵などにも類するように思われ、「宝曆版經」の行間にあしらわれた蓮華の裝飾が、同南藏に認められる宝尽に類することとも併せて図様の検討が要される。未調査の段階ゆえ想像の域を出ないが、北藏を底本とし南藏を対校本とした嘉興藏の扉絵などの影響を受けた可能性（後述）も視野に入れ、今後検討したい。¹⁴

続く第二図は、左方に「金光明最勝王經說法大会」、右方には「在_ニ王舎大城。鷲峰山頂_ニ。釈迦牟尼仏。」という文字が掲げられ、鷲峰山で說法する釈迦の間近に焦点が絞られて、「梵」「釈」「四天」の文字とともに、梵天・帝釈・四天王・阿難陀・舍利弗・辨才天女・吉祥天女などが見いだされる絵図となっている。

一方、次なる第三図は、義浄が則天武后から『最勝王經』訳出の勅命を受ける場面が描かれ、右方の「大唐_ノ。則天順聖皇帝。嗣聖十七年。十月制_{シテ}於_ニ三藏沙門。義浄_ニ。」から左方の「令_レ訳_ニ金光明最勝王經_ヲ。廻_テ。一部十卷三十一品_ノ金經。此也_」へと、『最勝王經』の訳經の経緯が説かれる。

第四図は『最勝王經』の供養壇場図で、右方に「金光明最勝王經供養壇」、左方には「諸尊擁護捍行者勤修相」とあって、壇場中央の天蓋の下に宝珠の中の蓮台上に「諸法之父」「諸仏之母」の語とともに「金光明最勝王經」が安置されている。壇場には蓮台上の經典を取り囲むように、左方に帝釈、右方には梵天が、同様に弁才天女と吉祥天女が、堅牢地神と僧慎爾耶がそれぞれ対座し、一段下がって四天王、手前の前机には「読誦恭敬行者」と記される修行

者が壇場の金光明最勝王經に向かつて座す姿で描かれている。

第五図は経題の図で、左右二面からなり、左図は壇場の幕内に蓮台上の「金光明最勝王經」七文字の経題が「如雖有諸用」、「金性不改文」の語を左右に添えて描かれ、右図は界線の施された經典料紙に「ソバダ金ハラバ光明ウタマ最勝／アランジャ王ソタラン經」、「ソハダ蘇婆那金ハバシヤ縛婆娑光明ウタマ鬱多麼最勝／アランジャ羅若王ソタラン蘇達覽經」と、四行に二種の経題が示される。即ち、右方二行は地界に「義淨翻訳ノ梵本ニ出ッ也」と示され、義淨が訳経に用いた梵本を用いたとされる梵字が右傍に片仮名訓を付して記され（小稿では梵字表記を略す）、その下に対応する漢訳漢字が割書されており、対して左方二行の地界には「弘法大師ノ開題ニ出ッ也」と示され、義淨翻訳の梵字とは一部異なる梵字の右傍に片仮名訓が、その下に漢訳漢字が割書され、さらに梵字の左傍にはその音写文字が付されていることが注目される。即ち、ここに義淨と空海の二様の梵字の経題が並立して提示されており、いわゆる経題の校合ともいべき、訳経における翻訳相互の言語と梵語の音写が併記され、総じて梵字・漢字・片仮名という三種の文字表記による陀羅尼の解釈学の展開がみてとれる。また、この五図の左右の二面は、おそらく実際の護符へと仕様が転じられるであろう構図となっている。

釈迦の『金光明經』の場として伝えられる靈鷲山にはじまり、皇帝の訳経勅許による義淨訳『最勝王經』の誕生、修行者が『最勝王經』を供養する場面、そして実際に護符として配布され、呪される陀羅尼へと、順に身近な信仰の場へと展開するこうした「変相図」の扉絵としての性格から、それを絵解きする場が彷彿とされる。このことは冒頭の変相図にとどまらず、各品の経題の下に曼荼羅の数が細字で記されていることをもつても見てとれる。以下に、いくつかの事例を挙げる（引用は仮名訓を（ ）内に付し、訓点を反映して読点を加えた）。

たとえば、巻第一の序品は「是品曼陀羅一幅而全（コノホンノマンダライツブクニシテマッタシ）」とあって、品内で一幅の曼荼羅が掲げられていることが想起される。その他の品については、大方がこの序品と同様に「一品一幅」の曼陀羅が

掲げられていたとみられるが、なかには一品内に複数の曼陀羅が掲げられる場合もあり、最も数多く「一品四幅」の曼荼羅が掲げられた品として「四天王護国品」や「大辨才天女品」があつて、「是品曼陀羅四幅而全（コノホンノマングラシフクニシテマツタシ）」と記される。

また、「一品二幅」が掲げられた品としては「大吉祥天女增長財物品」や「王法正法論品」、「捨身品」が「是品曼陀羅二幅而全（コノホンノマングラニフクニシテマツタシ）」とする。一方、「二品一幅」というように品を亘って一幅が掲げられたものもあり、「除病品」と「長者流水品」には、「是品曼陀羅合除病品二幅（コノホンノマングラデヨビヤウホンニガウシテニフクニシテ、シカフシテマツタシ）」とあるほか、最末の第十巻においては、「是以下諸讚歎品及付嘱品等曼陀羅合成一幅」而全（コレイゲノモロモロノサングダンホンヲヨビゾクホントウノマングラ、イチフクヲガウジャウシテ、シカフシテマツタシ）」として、「十方菩薩讚歎品第二十七」以下「付嘱品第三十一」までの五品をまとめて一幅が掲げられていたことが見てとれる。

ここに「四天王護国品」内の曼荼羅に関する記載を追うならば、「初幅至此乃已（シヨフクコ、ニイタツテイマシヲハル）」、「第二幅目至此乃已（ダイニフクメ、コ、ニイタツテイマシヲハル）」、「第三幅目至此乃已（ダイサンブクメ、コ、ニイタツテイマシヲハル）」、「第三幅目至此乃終（ダイシフクメ、コ、ニイタツテイマシヲハル）」などと、順に箇所を区切り、経文の内容に添った四幅の曼荼羅が掲げられるかたちで読誦が段階的に進められるようにできている。これは「正徳版経」が講経の場において、実際に曼荼羅の軸を掲げ、説示のために用いられていたことを示している。『最勝王経』と曼荼羅といえば、経内文字で宝塔を描く「金字宝塔曼荼羅図」があり、また『金光明最勝王経曼荼羅記』（旧浅野蔵）なる写本の存在もあるが、「正徳版経」の講説に如何なる曼荼羅が用いられていたかについては現段階において未詳とせざるを得ない。

また、識語に「陀羅尼梵音」と称される梵字については、「正徳版経」の奥書識語にあるごとく覚彦、即ち靈雲寺の浄厳和尚による文字の版刻であることが明記されている。それは梵本からの漢訳仏典への訳経の際、梵音を漢字に音写した表記が再び梵字によって表わされるもので、その梵語（悉曇）の右傍に梵音を片仮名で訓じる表記がなされてい

ることが注目される。それは真言としての陀羅尼を可能なかぎり梵語音に近い音で呪することで、その功德が弥増することを願うものと考えられるが、そうした浄嚴の梵字に対する境地については後述（八節）したい。

『最勝王經』には、「如意末尼宝心呪」や「護身呪」、「十二縁起相応陀羅尼」といった種々の呪の名が見られるが、『正徳版經』のそれぞれの真言陀羅尼の箇所を眺めれば、「呪ヲ説イテ曰ハク」という經文のことばの後に「陀羅尼梵音」があつて、その末尾に「ト、トナヘネズベシ」というように、經典本文にはない具体的な所作を指示する言が仮名書きで付されている。たとえば、『最勝王經』の「四天王護国品」内の真言陀羅尼の音写のなかに「称加我名」という漢語の挿入があり（『正徳版經』がそれを「ソノヒトノナヲトナヘクハヘヨ」と訓んでいる）、すでに義浄の訳經の段階において当該の呪に対する指示の語が漢訳に挿入される例が認められるが、この真言陀羅尼の後に付される所作の指示は義浄訳には見いだされない『正徳版經』に特有の記述である。いくつかの事例を引くならば、

「然シテノチ呪ヲ誦シ其ノ壇ヲ結セヨ。結界ノ呪ニ曰ハク（左注「ソノダンヲカギリテ、キヨムルノ」）：〔陀羅尼〕：ト
トナヘテ、キヨムベシ」

「水ヲ呪シ湯ヲ呪スル呪ニ曰ハク：〔陀羅尼〕：ト、トナヘカクベシ」

「次ニ護身ノ呪三七偏ヲ呪スベシ。呪ニ曰ハク：〔陀羅尼〕：ト、トナヘナガラ、コ、ロヲミノゴカシヨニ、ア
テ、カズベシ」

などというように、実際に所作を加えながら各々の呪が唱えられ、經典が読み進められるようになっていく。また、「呪」は「シュ」と清音で発音していたことが仮名訓により知り得、「頌説イテ曰サク、ソバ〈ア〉カ〈ア〉ト、トナヘネズベシ」というように、「沙訶śvāta」という真言陀羅尼の末尾に付して成就を祈る語をどのように発音するかなどの細かい訓みが示されている箇所もあり、『正徳版經』が儀軌としての機能を兼ね備えた説誦のための經典であったという側面が浮かび上がってくる。そのほか、「大弁才天女品」に「香藥三十二味」に対する「陀羅尼梵音」（仮名訓

を付した梵字」と、その下に漢語の割書きに漢字の薬名が仮名訓を付して示され、諸患の障難を悉く除滅するための「洗浴の法」の次第が具体的な呪とともに記される箇所を拾うことができる。

そうした陀羅尼の功德について『金光明略縁起并供養行軌』には、

今この経文の中、金勝無染著の纔一二の陀羅尼を受授し念誦する功德すら尚かくの如し。何に況や、一部十巻の経文諸陀羅尼を礼拝し、供養し、受持し、誦念し奉る人に於てをや。実に以て、有難く頼母敷哉。

と、僅かな陀羅尼を受持し念誦することでさえ功德が得られるのであるからと、『最勝王経』十巻に示される三十五の陀羅尼を礼拝・供養し、受持・念誦する者の功德ははかり知れないことが説かれている。『最勝王経』を講経論義する最勝講の具体的な唱導テキストもあり、同経が如何に釈せられていたかを知る得る上で示唆に富む事例が知られるが、こと「正徳版経」は、經典本文の提示という枠を超え、経文の読誦と陀羅尼の念じ方などに重点を置いて教導する「講経の場」をも含み込んで文字化したテキストと言いえよう。

五、本経の特徴(その三)——「異本校合」および「義浄註文」

当該の「正徳版経」は、天界部に異本校合に関する注が四角囲みで随所に示さる形式をとっている。たとえば「四天王護国品」においては、「別本^ニ然^ラ作^ル生^ニ受^テ作^ル愛^ニ」や「別本^ニ執^テ作^ル擎^ニ」、「別本^ニ嘗^テ作^ル常^ニ」、「別本^ニ髣^テ作^ル量^ニ」と別本との校合が注記される。少なからず諸本の校合において異同が認められる箇所であり、別本は高麗本が想定され、本文は奈良時代の古写経である国宝西大寺本(天平宝字六年百濟豊虫願経)に一致する箇所が随所に見受けられるが、また異なる箇所も存し、その場合は明本と一致する傾向がある。⁽¹⁸⁾ 開版の底本に至る流れを明らかにする徴証として今後検討を要する。

また、なかには具体的な諸本名を記す校異もあり、たとえば「南蔵及^ビ合部^ニハ【サン】^ヲ作^ル【ナ】^ニ此^レ正^{ナリ}也【】」

内は梵字、ここでは略す」とあって、永楽南蔵本や合部金光明経本に表記される陀羅尼の梵字を改訂したとするものや、
 「【タハラバ】^{トハ}梵語^{ナリ}義浄^ノ訳本^ニ欠^{クレ}之。故^ニ因^デ施護^ノ訳本^ニ今^マ改^コ正^{スル}之^ヲ者^{ナリ}也」と、光明電王の「タハラバ」の梵
 語が義浄の訳本に欠けているとし、宋の施護訳『消除一切閃電障難随求如意陀羅尼経』によって補訂し改正したことが示される。明代の永楽南蔵や北蔵の本朝への伝来事例はほとんど認められないとのことであるが、或いは、永楽北蔵本を底本とし、永楽南蔵本を校勘に用いた嘉興蔵（万曆蔵）を介しての校異の可能性があらうか（八節に後述）。

そのほか、本文の上部余白に四角囲みで私注と思しき注記が全体で十箇所ほど施されている。左記はその事例の一つで、序品の第一の偈「若欲聴是経…聴聞是経者」の上方の余白に、聴聞の心得を当該の偈を噛み砕きつつ、さらなる解釈が加えられる（／は改行）。

聴聞用心／常^ニ生^シ歡喜^ノ念^ヲ／能^ク長^シ諸^ノ功德^ヲ／恒^ニ起^シ慈悲^ノ意^ヲ／專^ラ注^テ心^ヲ無^レ乱^ル／令^メ心^ヲ淨^シ無^レ垢^ヲ／以^テ尊重^ノ心^ヲ聽^ク音^ヲ誦^テ者^ノ鎮^シ耳^ヲ／而^テ結^セ緣^ヲ／訓^シ誦^テ者^ノ心^ヲ撰^ツケ^テ／耳^ニ而^テ記^シ聞^ヲ解^シ說^ヲ者^ノ聽^ニ心^ノ耳^ニ而^テ知^ル覺^ヲ／サトリシレ

これによれば、無垢なる尊重の心をもつて聴くべしとして、「誦誦が音誦の場合には耳をすましてその声に縁を結び、誦誦の場合には心をとどめてそのことばを耳に聞き覚え、解説の場合は心の耳に聴いてその道理を知覚するように」と、具体的な聴聞の作法が示される。全体を通して本文左傍に適宜加えられる語意の域、または品の域を超えて説示が及ぶ時に認められる注記と考えられる。

加えて、それとはまた異なる「義浄註文」と称する註の挿入が本文内に認められる。開版の底本およびそれに臨んで蒐集された注疏類を考える手がかりとして注目しておきたい。それは「四天王護国品」と「大辨才天女品」に、「義浄註文」という註釈として二箇所ほど見いだされるもので、「正徳版経」ではこれを「義浄註文」の名のもとに改行を加えた表記をとっている。本文の後に、「義浄註文」という文字を黒地に白字で刻した陰の楕円状扁桃型の墨印が版

刻され、改行して本文の一字下げから細字割書き（双行）で注が付されている。

ここに「四天王護国品」内の事例についてみれば、薛室囉末拏王（多聞天）が王子に施与について述べた「汝速カニ去リテ、日日彼ニ一百迦利沙波拏ヲ与フベシト」の「一百迦利沙波拏」という梵語に対する註で、これを「正徳版経」の仮名訓にしたがって訓読すれば次のごとくである。

コレハコレ根本ノ梵音ナリ。唯シ貝齒トモナヅク。シカシ方ニ随ツテ不定ナルナリ。或ヒハコレ貝齒トイ、或ヒハコレ金銀銅鍔等ノ錢トイフ。然ルニ摩揭陀ニシテ現ニ今通用スルハ一ツノ迦利沙波拏、一千六百貝齒有リ。總数ハ以ツテ準知スベシ。若シ物ノ直ニ准ズルズンハ処ニ随ツテ不定ナルナリ。若シ人、呪ヲ持シテ成就スルコトヲ得ルノヒトニライテ、物ヲ獲ルノ時アラバ、自ラ其ノ数ヲ知りナン。有ル本ニ云ヘルモ、毎日一百ノ陳那羅ヲ与フト。即ハチ金錢ナリ。乃至尽形マデモ日日常ニ得セシメントナリ。西方ニシテ求ムル者、多ク神驗有リ。不至心ナルヲバナリ。

ちなみに「西方」の右訓は「サイホウ」、左訓は「テンデクニシテ」とあり、この註文が「一百迦利沙波拏（イツヒヤクノキヤリシヤハダ）」はカールシヤバナ *Karsapana*（印度の錢貨、漢語で貝齒）についての註記であることが知られる。いま一つの「大弁才天女品」の註文は、弁才天女の勝妙なることを讃嘆する頌の後に、改行して「義浄註文」の版刻があり、「此ノ上ノ呪頌ハ、是レ呪ニシテ亦是レ讚ナリ。若シ呪ヲ持タン時ハ、必ズスベカラクコレヲ誦スベシ」と、偈にあたる頌も、機に応じて呪として「誦（よみな）える」べきことが註記されている。

巻序の経内字数を明記する箇所には、「但シ、義浄註文ノ総字一百十有四字ハ除ク」（四天王護国品）などと記され、本文との区別がなされていることから、あくまでも義浄訳とは次元を異にしつつも、早い段階で義浄訳に挿入された陀羅尼に対する認識に不可欠な註文と読み取れる。この箇所は、義浄の高弟として知られる西明寺の慧沼が、『最勝王経』訳経後の景龍四年（七一〇）、大薦福寺に移された訳場に証義として参じ、師のもとで研鑽を積む過程で注釈し

たとえられる『金光明最勝王経疏』に細字註として認められるとともに、奈良古写経の西大寺本にも同註が見いだせることから、訳経に極めて近い段階で採り入れられた書付と考えられる。²⁰⁾

法相第二祖としても知られる慧沼の注疏の南都における受容は高く、本朝における『最勝王経』の注釈としては、初期段階の東大寺法相の明一(七二八―七九八)の『金光明最勝王経註釈』(以下、「明一疏」と記す)や、西大寺に止住した常膳(七四一―八一五)の『註金光明最勝王経』(「常膳疏」と記す)があるが、その各々に当該註の引用がある。²¹⁾ うちの「常膳疏」に当該註の前に、「迦利沙波拏ハ、注解ヲ觀ズベシ。即ハチ、注ニ案ズルニ云ハク(筆者訓読)」という記載が認められることから、「常膳疏」を遡る注解としての「明一疏」、もしくは大陸の学僧による注釈の存在が想定される。とりわけ「常膳疏」の底本とされる新羅僧勝莊の注釈『金光明最勝王経疏』(以下、「勝莊疏」と記す)は、その現存せざることが惜しまれるが、義浄の『最勝王経』訳出の場に参画していた僧の注釈としての意義は大きく、念頭に置いておきたい注釈である。

いずれも確認し得る古注釈に「義浄註文」という文言は見いだせず、註記の仕方については「正徳版経」の特質という可能性も否定できないが、先述した扉絵における「変相図」や、後述する浄嚴周辺における江戸期の中国版経の受容を踏まえつつ調査し、確認することが要されよう。こうした「異本校合」や「義浄註文」の注記箇所が、「正徳版経」の本文が如何にして提示されたかを解く一つの鍵となろう。

六、『最勝王経』の密教的要素と本朝における受容史点描

右に書誌以下、江戸の真言師浄嚴和尚にゆかりの湯島靈雲寺で開版された当該の『最勝王経』の特徴をみてきたが、本節では先学の教学研究に導かれつつ、本邦における『最勝王経』の受容の歴史の中で、その「正徳版経」開版の経緯を辿っておきたい。

わが国における義浄訳の『最勝王経』の注釈として注目すべきものに、東大寺明一の『金光明最勝王経註釈』十巻がある。願曉（八三五―八七一）の『金光明最勝王経玄樞』に引用があり、奈良朝の仏教を受けて平安初期に成った注釈書で、義浄の高弟であつた慧沼の『金光明最勝王経疏』を「沼疏」として引き、自説を加えたものとして注目される。²² 江戸期の謙順（一七四〇―一八一二）撰述の『諸宗章疏録』『大日本仏教全書』『仏教書籍目録第一』に披見せられるが、『大正新脩大藏経』の続経疏部一に東大寺古写本をもつて初めて収録され公刊された注釈として知られる。

その序に『金光明経』が仏法東流して久しく経本の単復が生じた中の六種を挙げている。すでに『金光明経』諸本については教学研究によって明らかであるが、ここに『金光明最勝王経註釈』によって『金光明経』の諸本を挙げ、訳経者や品数等に関する記述の箇所を書き出し、一覧すれば次のごとくである（傍線、*は筆者）。

四巻経（十八品） 梵云曇無讖

五巻経（二十品） 耶舍崛多

六巻経（二十二品） 西天竺優禅尼国三蔵法師梵云波羅末陀梁云真諦

七巻経（二十三品） 西天竺三蔵法師波羅末陀梁云真諦輔最淨地品闕以成七巻

八巻経（二十四品） 北天竺健陀羅国三蔵法師闍那崛多耶舍崛多訳出沙門彦琮重覆校勘大興善寺沙門寶貴

* 古訳合糅（合部金光明経）

十巻経（三十一品） 周義浄三蔵

右の六種のうち、現存するのは曇無讖訳と釈宝貴等合糅訳の二種の旧訳、そして義浄訳の新訳を合わせた三種である。四巻本から十巻本への増広は教学研究によって明らかにされており、『最勝王経』は二十四品の八巻経に更なる七品を増補して三十一品の十巻経となっている。注目すべきは、明一の注釈に旧訳に対する新訳としての『最勝王経』の梵本が「妙契ナル西音ト謂フベキ貝葉ヲ伝ヘテ謬無シ」と高く評価されていることである。義浄については、法顕

や玄奘の偉業を慕い、広州から海路印度に赴いて二十五年ほど印度に滞在し、証聖元年（六九五）に帰国、則天武后の勅許を得て最新の梵本を新訳として翻訳したことが知られる。後に義浄の供養塔がある洛陽龍門の北高岡には、玄宗皇帝によってその功が讃えられ、象徴となる金光明寺が建立されたとされるが、同経の受容と流布は、その後の唐朝の命運とともに、むしろ海を渡った本朝において顕著であった。

その第一に仏教公伝を叙述する『日本書紀』欽明天皇条の随所にその『最勝王經』の言辞が採り入れられている。書紀編纂の養老四年（七二〇）を遡る同経の伝来は確かなことながら、その請来については詳らかならず、義浄の訳出前年にあたる大宝二年（七〇二）に入唐し、訳経時に在唐していた大安寺道慈の帰国時の養老二年（七一八）とする従来説に加え、それを遡る新羅経由の伝来説が新たに提示されている。²⁴ 確かな請来時点を見定めることはできないが、本朝への伝来と受容の実態が義浄訳出の長安三年（七〇三）から程ない神亀二年（七二五）七月戊戌（十七日）の『続日本紀』の記事を初出とすることは注視しておきたい。²⁵

諸寺の院の限は、初めて掃浄を加へ、仍て僧尼をして金光明經を讀ましめよ。若しこの經無くは、便ち最勝王經を転して、国家をして平安ならしめよ。

この七道諸国に対して発せられた詔に、既來の『金光明經』の転読に加え、その所藏無き場合は新來の『最勝王經』の転読をもつて国家の祈願が促されていること、またこれに次ぐ左記の同五年（七二八）十二月己丑（二十八日）条とともに、『最勝王經』受容の実態を知り得る記録である。

金光明經六十四帙六百冊卷を諸国に頒つ。国別に十卷。是れより先、諸国の有てる金光明經、或る国は八卷、或る国は四卷。是に至りて写し備りて頒ち下す。經到る日に随ひて即ち転読せしむ。国家をして平安ならしめむが為なり。

これによれば、既に所藏せる八卷本、四卷本の『金光明經』に加え、新來書写の十卷本の義浄訳『最勝王經』が諸国

に頒布され、国家の平安のための転読が促されていることが知られる。既に指摘があるように、このことは「金光明經」を讀誦した際の供養料等に関する天平四年から十一年の「諸国正税帳」に記録が残り、越前・薩摩・但馬・和泉・駿河国に四卷本が、淡路・伊豆国には八卷本の所蔵があり、その上でそれぞれにさらなる新訳の『最勝王經』十卷本が頒布された。⁽²⁶⁾

そうした状況のもと、『金光明經』の新訳である義浄の『最勝王經』は、同じく則天武后のもとで実叉難陀により訳された『華嚴經』八十巻とともに、聖武天皇の詔のもとで本朝は南都の東大寺に導入されたのであった。在唐時に義浄の訳出に遇った道慈は、帰国後の天平九年（七三七）、大宰府管内の諸国から全国的に蔓延した疫瘡流行の災異祈願のため、宮中大極殿で『最勝王經』講説の講師を勤めている。訳経から時を経ずに請来され、武后の大雲寺制度を模した国分寺政策とともに、天平十三年（七四一）の詔によって諸国の七重塔内に同經十巻一帙が納経されて全国的に宣揚・普及されたことは、その後の同經の受容に大きな影響を与え、『仁王護国般若經』、『妙法蓮華經』、『金剛般若經』、『大般若經』などとともに、「除災与福」の読誦經典として重用された。やがて年頭における宮中御齋会が創始され、内論義（八日始・十四日結願）を伴う学僧の講会となり、興福寺維摩会に加えて宮中御齋会や薬師寺最勝会（南都三会）の講師を順に勤めたものを「已講」とし、僧侶の階梯である律師補任という僧綱昇進の道が約されることで、『最勝王經』の位置は高められた。⁽²⁷⁾

遡ること天武五年（六七〇）に曇無讖訳『金光明經』が『仁王經』とともに諸国に講読されたことや、同八年（六七九）に宮中で講ぜられたことで同經の国家的な受容が認められるが、その天武朝の事例を前提としつつ、聖武朝が旧訳を改め新訳の『最勝王經』を掲げて宮中で講会を開く意義を新たに見いだしていたことは、日本における仏教受容の画期であると同時に、金光明經東流の教学史においても押さえておきたいことである。

なお、『金光明經』の教学史の一方には、天台大師智顗の曇無讖訳『金光明經』に基づく『金光明經玄義』や『金光

明經文句』から展開した天台教学における注釈研究の蓄積があるが、「正徳版經」成立の背景には慧沼の疏の流れを汲む南都の法相宗系の注釈の影響があった可能性が高いものと推定される。但し、天台山で悉曇を学び、青龍寺で三部秘法（兩界・蘇悉地）の伝授を受け、曼荼羅に関する撰述もある円珍（八四一—八九一）に「金光明最勝王經疏」〔山家祖徳撰述篇目錄〕卷上と称する『最勝王經』の注釈があったことは注視しておきたい。現存はしないが、近江藩主であり、玄蕃頭であった直治がその膝元である三井寺の台密師の書の搜索に及んでいた可能性を念頭におくことは、同經の密呪に関わって重要と思われる。

ところで、『金光明經』の密教的要素については、教学史の中で重ねて論じられてきた。夙く渡邊海旭氏はこれを密教經典として位置づけたが、これに対して金岡秀友氏は「密教的經典とはいえても、決して密教經典とはいえないと思う」と述べている。⁽²⁸⁾一方、中村元氏は「『金光明經』は、すでに『法華經』の中に示されている若干の特徴をさらに発展させて、タントラ仏教（密教）へ移るための中間項を形成」との位置づけを示し、その呪術性のゆえに中国・日本において盛んに遵奉されたことに言及する。⁽²⁹⁾こと新訳の『最勝王經』の密教的要素について藤谷厚生氏は、金光明經全般の教学史の展開を跡付けるなかで、曇無讖訳（四卷本）から義浄訳（十卷本）への展開における陀羅尼が、一呪から三十五呪へと増加したことを指摘され、その陀羅尼の質に変化が認められることについて言及されている。⁽³¹⁾

義浄には、『南海寄帰内法伝』四卷、『大唐西域求法高僧伝』二卷の著述とともに、五十六部二百三十卷の訳出經典があるが、そのうちの十一部十三卷が『大孔雀呪王經』をはじめとする密教經典の訳出であった。義浄の印度留学時にナランダー寺院は完全な密教道場となっていなかったにせよ、急速な密教化の波が押し寄せていたことが平川彰氏によって指摘されている。⁽³²⁾大乘經典に陀羅尼や真言がとり入れられる傾向が増大し、雑部密教經典が相次いで誕生する時代の趨勢を受けとめつつ、義浄は梵本を請来し、新訳の金光明經の訳出を行ったということになる。ある意味その密呪の威力は義浄が訳した梵本のなかにすでに胚胎されていたといえるが、梵本にはない漢訳における増広も

多分に含む点も看過できない点である。それは金剛智によって『金剛頂經』が訳出された開元十一年（七三三）、善無畏によって『大日經』が訳出された開元十三年（七三五）という純密（純粹密教）の經典が訳出される直前（成立は七世紀半ば頃および後半とされる）の極めて微妙な時期に位置づけられる訳經であり、「密教化」もしくは「密教的」な要素を多分に含む經典であつた。

教学史的には大乘經典に位置づけられるとしても、經内に密教を起す源流ともなつた「呪（陀羅尼）」の増広が著しい義淨訳を、密教事相を具現化するに相応しい經典として江戸期の密師である淨嚴が受けとめたことになる。「正徳版經」の『最勝王經』が開版されるに至る経緯は、何より『最勝王經』にそうした多くの陀羅尼が含まれていたことによると考えられるのであり、さらに秘密真言とみなした陀羅尼の表記を漢訳の音写語にとどめずに、梵字を用いて「陀羅尼梵音」として表記するといった、画期的な『最勝王經』のテキストが生みだされたのであつた。淨嚴と願主直治両者における『最勝王經』の重用はいかにしてあつたのか、次にその実態の一端を見つめておきたい。

七、徳川綱吉と井伊直治、および淨嚴と『最勝王經』

元禄四年（二六九二）、河内延命寺の淨嚴和尚は柳沢吉保邸で將軍徳川綱吉に謁見し、御前で『法華經』の普門品を講じて以後、同邸への入御ごとに謁見を重ね、帰依を受けて湯島に三千五百坪の地を賜り、宝林山靈雲寺を開いて真言の戒律復興をめざし、如法真言律宗を立てた。そうした綱吉と淨嚴の間には、『最勝王經』を介して交渉があつたことが、『淨嚴和尚行狀記』（以下『行狀記』と記す）の元禄九年（二六九六）三月二十六日条に記されている。⁽³³⁾

最勝王經如意宝珠品六本ヲ書シテ城中ニ安置ス。雷難ヲ除カンガ為ナリ。又、守護ヲ書シテ獻ジ玉フニ、大樹常ニ懷中ニ所持シ玉フ。毎年極月廿七日ニ下賜シテ、加持シテ又上奉ルナリ。消除雷電ノ秘法ハ他流ニハナシ。和上春夏秋之間、不斷ニ此ヲ修シテ祈念シ玉ヘリ。

綱吉が雷を異常なほどに恐れたことは逸話として知られるが、浄厳は雷除のために同品を六本書写して江戸城中の六箇所に納め、雷除の護符を献じ（『徳川実紀』）、また他流にはない「消除閃電陀羅尼法」を撰して春夏秋冬の間、不斷にこの秘法を修したという。その所以は、『最勝王經』「如意宝珠品」に雷電遮止の法が説かれていることにある（『正徳版經』の仮名訓に従って訓読）。

若シ住処ニ於テ、此ノ四方ノ電王ノ名ヲ書シナバ、所住ノ処ニ於テ雷電ノ怖レ無ク、マタ災厄及ビ諸ノ障礙無ク、非時ノ枉死、悉ク皆遠離セントノタマヒテ…（以下略）

「正徳版經」には、四方電王の名を記す「書」の字の左注として「カキシルシ、シハウニハリテ、マツリナバ」と、実際の供養法が示されている。これを直治の『金光明経略縁起并供養行軌』「四方電王の名号」の段に照らせば、四方電王の各々の名号の音写を示した後に次のごとくあつて（句読は筆者）、

今この電王の名号を四紙に書して、各方に随つて方に押し、また南無大金光明最勝王經と申す十字を別紙に書して、天井の真中に押し奉りて守護を蒙る時は、雷難を遁るのみにあらず。一切の枉死枉難、皆免る。その故はこの經の在す所をば、一切の諸仏神および一切の悪鬼魔王までもこれを守護し奉らんと、堅く誓ひたまへばなり（略）或は懷中し、胸に掛け、乗輿・笠・傘・蚊帳・純帳・甲冑・著籠・太刀・刀の柄の内・頭巾・冠・烏帽子・装束、そのほか何に限らず隨身の物に皆これを納めて守護を請ふべし（略）經名および四電王の号を張り置き、雷の鳴る時口にもこの五名を唱ふれば、その身の上、家の上をば雷電恐れて近づく。これ故にこれを雷よけの札と云ふと習ひ伝へり。

と、雷除の護符を懐く当時の具体的な信仰の実態が浮かび上がり、先の綱吉の記録の裏付けともなる。また、同書後方に合冊される供養行軌には「如意宝珠陀羅尼法」の法儀が示されており、『最勝王經』の「如意宝珠品」が実際の功德と結びつき、信仰を集める品であつた事例の一つとしても注目される。

ところで、同じように独立して信仰を集めた品に「大弁才天女品」がある。これについては直治公にその事例が認められ、元禄八年（一六九五）、彦根城の鬼門（大洞山中腹）に大洞弁天堂の建立を行い、弁才天坐像（日本三天弁天の一とされる）を安置したことが挙げられる（長寿院・真言宗醍醐寺派）。直治が総奉行として東照宮修造（元禄元年十一月から同三年二月）を行ったことは既に述べたが、その修築に携わった甲良の木工を登用しての権現造りの堂で、日光の眠り猫を模した猫の彫刻が堂の正面の欄間に配されている（国指定重要文化財）。「一人一文の衆生の奉加」を寄せて事業を成すことに意義を見いだしていた直治の営為が、二十五万九千五百二十六人の霊位を祀る寄進帳というかたちで遺されたもので、直治の『最勝王経』にちなむ事蹟と見られる³⁴。

奈良時代の聖武朝が『最勝王経』に基づく「金光明最勝王総国分寺」として東大寺を開き、聖武帝が「夫れ天下の富を有つは朕なり。天下の勢を有つは朕なり。この富と勢とを以て此の尊き像を造らむ。事成り易く、心や至り難し。（略）如し更に人有りて一枝の草一把の土を持ちて像を助け造らむと請願する者有らば、恣に之を聴せ」と、万民の力を結集して毘盧舎那仏（大仏）を建立したことは広く知られるが、³⁵それにもなぞらえた直治の創意であったと想像される。それは折しも東大寺が大仏復興における大仏殿再建のため、別当済深法親王や大勧進公慶上人が上洛を重ね、綱吉との関係構築による幕府の支援を得んとしていた時期にあたる。³⁶当代の大老として、また玄蕃頭としての経験から、直治は諸人の浄財を募って法の場を造立するという勧進のもたらす功德の力を誰にもまして知る者であったろう。加えて、戦国時代以来の領内の在地城主・館主の戒名（俗名）を金泥で書し、大坂夏の陣・冬の陣の戦没家臣の霊をも鎮魂する象徴的な場としたことは、その深慮のなせるものであった。

これまでその建立の発願は、直治の奇病を治した松島升順なる者の弁才天勧請の勧めによるとの伝承（堂鐘銘に升順の名）があるものの詳らかならずとされてきたが、先の將軍家の雷除けに用いられた「如意玉珠品」のように、『最勝王経』の中でも個別に信仰を集める「大弁才天女品」に依拠した、領地を守護する弁才天堂の建立であったというこ

とが考えられるのである。すなわち同品には、弁舌の才能豊かな大弁才天女のことばが次のように説かれている（「正徳版經」の仮名訓に従って訓読）。

彼ノ人ノアラユル惡星ノ災變ト、初生ノ時ノ星属ノ相違セシト、疫病ノ苦、鬨諍・戰陣、惡夢・鬼神、蠱毒・厭魅、呪術・起屍ト、是ノ如キ諸惡ノ障礙ヲ為セル者ドモ、悉ク除滅セシメン。

このことは、『金光明略縁起并供養行軌』の次のような、

此の經は諸仏の師なり、君なり、父母なり。然れば則ち何の仏菩薩を信仰し奉る人にもあれ、或は弁才天女を頼み奉る人にもあれ、其の外、吉祥天、毘沙門天等諸天善神を祈り奉る人にもあれ、各其の信ずる有縁の形像を安置せる。其の頂になりとも、又は中位の中尊になりとも、必ず此の御經を備へ奉り、別に香華燈明飲食等の供養を成し奉り、心も垢無く、清澄にして、礼拜、誦誦、講説し奉るべし。

と、語られるところに符合するもので、まさにそれは「正徳版經」に刻まれた同經に対する直治の篤信をもって首肯されよう。

いま一例、「大弁才天女品」についてみると、貞享二年（一六八五）正月十二日、浄厳和尚は三田の仮住まい（商家和泉屋覺心宅）にて、河内高安教興寺の鎮守弁才天女の百座供養念誦を行う会中、十七項の秘訣を『大弁才天秘訣』に撰し、同十二月に「如法大弁才天供次第（草本）」一帖を草しており、後に元禄八年十二月十三日に著したという「大弁才天法」がこれに相当するかと思われる。後に正徳三年九月に『秘訣』を三冊本で刊行しているが、そのなかに同品の引用が認められる。³⁷⁾

右の直治と浄厳の事例は、江戸期における弁才天と『最勝王經』の信仰の実態を顕すものであるが、思えば「大弁才天女品」を収録する金剛院蔵「宝暦版經」の第七巻の一卷のみが、水濡れによる展開不可の状態となっているのを不審に思っていたことが、これらの信仰史を辿ることによって水解除する。同寺には宇賀神を冠として頂く弁才天立像（秘仏）

があり、修法のために同経の当該巻が同尊像付近に別置されていた可能性が推測されるのである。弁才天女、すなわち「薩囉薩伐底 Sārasvatī」はリグ・ヴェーダのなかで河川の神として登場し、流水所有者との原義から修法に水が用いられるのであった。関連版経のほかならぬ事例として、ここに拾遺しておきたい。

以上、『最勝王経』の個別の品の具体的な信仰事例を、双方に深い交流のあった綱吉、直治、浄厳周辺に拾ってみた。いずれも、『最勝王経』における「密呪」としての陀羅尼が枢要な役割を示していたことは明らかである。こと「正徳版経」の本文表記のことに視点を絞れば、すでに書誌で指摘したように、全体を通して和語によって「読誦」することに主眼が置かれ、具体的な信仰の柱となる「密呪」が浄厳の「陀羅尼梵音」により示されることにその最たる特徴が見いだされる。この浄厳の「陀羅尼梵音」についての検討が、「湯島霊雲寺版」である「正徳版経」の成立を見定める上での鍵となろう。次節で少しく浄厳和尚と悉曇のことに考察を及ぼしてみたい。

八、浄厳と「陀羅尼梵音」——『最勝王経』に胚胎された密教的要素、その日本的展開

真言密教史上における浄厳和尚の位置について、仔細な研究を著わされた上田霊城氏は、

真言密教は、大乘仏教の理論を継承し内包しながら、進んで三密行を修する実践宗教であるから、口に真言を唱え、手に印契を結び、心を本尊と合一させる実践行が不可欠で、その中の真言を欠くと三密行が成り立たない。

と述べられ、その浄厳の真言陀羅尼の特徴を「梵書して四声を指し、音写漢字を付け、片仮名を付し、時に字義句義を割註し、出典の経軌を明かしている」と分析された。⁽³⁸⁾ 新たに見いだされた正徳版『最勝王経』は、まさにその特徴が顕著な事例として注目され得よう。書誌以下に「正徳版経」の特徴をいくつかの観点から見てきたが、なかでもとりわけ象徴的であるのが「陀羅尼梵音」と称される浄厳の梵書に注がれた思想であったと思われる。浄厳は、「古徳曰ク悉曇ヲ知ラザレバ半真言師ト、我ハ曰ン、悉曇ヲ解セザルハ真言師ニハアラズト」と、常に切々と述べては悉曇学

に専心していたという（『浄厳和尚行状記』⁽³⁹⁾）。

その浄厳が悉曇の字記に深い関心を懷いていたことについては、柳沢吉保邸で奈良法隆寺の古貝葉を目にした時の感動が彷彿とされる自筆記録が残る（「浄厳写梵文般若心経等」跋文⁽⁴⁰⁾）。

*訓読は筆者

コニ大和州法隆寺宝庫旧蔵ノ中天ノ貝多両片、スナハチ是レ心経梵言、仏頂尊勝、及び悉曇十四音ナリ。今コニ揣摩ズモコレヲ遇覧スルコトヲ得。甚愜ノ素願、歡喜無量（中略）。ニハカニ一本ヲ瞻シ、更ニ対註・朱点・句義ヲ加へ、以テ后昆ヲ胎ム。殊ニ恨ムラクハ、原本ノ筆力、勁龍迴リ獅奔飛ブ、故ニ未ダ画虎類狗ノ謂ヲ免ガレズト。 宣元禄第七龍集甲戌十月末望、東都靈雲沙門釈浄厳書并跋

元禄七年（一六九四）の七月から十月にかけて、大和の法隆寺により伽藍修復のための出開帳が江戸本所の回向院で行われたが、同年九月、柳沢邸で催されたこの開帳に綱吉と桂昌院の靈宝御覧があり、浄厳は宝物五種の縁起を説いている（『妙極堂遺稿』卷七⁽⁴¹⁾）。これを遡る五月、浄厳は同寺僧に代わり「募縁の疏」をなし、その縁で『般若心経』と『尊勝陀羅尼』の二葉の古貝葉を披見し、対訳の機を得たのであった。法隆寺顕真による宝物目録『古今目錄抄』（十三世紀）に舍利殿保管の宝物として両貝葉の収納が認められるが、この貴重な梵本に値遇した浄厳が、流麗秀逸なる筆致の梵字で一字一字を写し取り、右傍に朱の仮名訓を付し、その下に音写の漢字や句義を示した一帖（縦一〇・〇糎、横二八・三糎の折帖の罫に左から横書きで記す）が現存する（現・東京国立博物館蔵⁽⁴²⁾）。その跋文に表わされた、「勢いある龍が迫り、走る獅子が飛ぶような、弛まず強い力で張り切る原本の筆力には到底及ばず」という、天竺伝来の貝多羅葉の梵字の筆勢に直に触れ得た無量なる感服が、悉曇の字記編纂に対する意識をさらに高めたことは疑いない。

高桶順次郎氏は「日本梵字史概観」において、奈良朝に起こった梵学（悉曇学）の歴史を跡付けるなかで、徳川時代を梵学再興が漸く熟した時期とし、「梵学復興の気運は独り音義の方面にのみ止まらず、その形の方面においても異常の着眼ありしを覚ゆ。浄厳は法隆寺貝葉を臨模し梵字の風格を正し、慈雲は高貴寺貝葉に拠り梵字の新生面を開き」

と評してゐる。⁽⁴³⁾

浄嚴の悉曇関連の著作は、天和二年（一六八二）に上梓した『悉曇三密鈔』を筆頭に左記のごとく多数挙げられるが、このうちの『華梵対翻』がそれに相当するものと考えられる。⁽⁴⁴⁾

『悉曇三密鈔』（刊本八冊）、『悉曇三密鈔冠書類採』（写本一冊）、『悉曇字記講要』（写本七冊）、『悉曇字記鄔那地鈔』（刊本一冊）、『華梵対翻』（写本四冊）、『梵文鑒本』（写本一冊）、『悉曇摩多体文』（刊本一冊）、『悉曇首書』（刊本一冊）、『悉曇再治』（刊本一冊）、『法隆寺貝葉梵文対註』（写本一冊）

この『華梵対翻』の成立時期は詳らかではないが、法隆寺古貝葉を臨模した折と同様、それは漢訳仏典および經疏類の梵字に触れてはそれらを微細に写し取り、その蓄積による集大成であったと推測される。浄嚴の悉曇に対する研鑽は、まさに梵字書法と音韻の悉曇学の双方を兼ねた字記編纂に結実したが、僅かにその存在が確認されていた靈雲寺藏の同本が先の大戦の戦火の中で灰燼に帰してしまったことは慨嘆に堪えない。⁽⁴⁵⁾

失われた『華梵対翻』に思いを致しつつ、「華梵」と称する、梵語を音写し梵字と漢字の併記を表わすと思われる語を追うならば、たとえば『密呪圓因往生集』（智広慧真編、夏天慶七年（一二〇〇）の序に、その語を見いだすことができる。⁽⁴⁶⁾

西域ノ高僧、東夏ノ真侶ニ命ジテ三復校詳シ、華梵両書ノ雕印ヲ流通シ、永ク不朽ヲ規ラムト、シカイフ。

ここに「華梵」の語が、西域や東夏の僧侶に命じて校勘を重ね刊行したという、梵字から漢語への音写に對して用いられていたことが知られる。この『密呪圓因往生集』（以下、『密呪集』と記す）は、聖地五台山における華嚴の往生思想を三十三種の陀羅尼によって表わし、その功德を説示するものであるが、野沢佳美氏が永樂南藏本の『密呪集』に関する研究において引用された和刻本の敘の中に、浄嚴所伝の梵文のことが見いだされ、注目される。⁽⁴⁷⁾

赤県ノ悉曇ノ学、久ク廢レテ（略）音韻通ジ亡シ。故ニ曩祖ノ所伝ニ依テ梵文ヲ書シ和点ヲ加テ、持者ヲシテ曉リ

易カラ使ム。

同本は、元禄十年（一六九七）に維宝蓮体（一六六三—一七二六）により刊行された和刻本であるが、ここに「曩祖」とあるのが浄厳のことで、この記述によれば、その甥であり高弟であった蓮体が『密呪集』の写本を入手し、叙を付して刊行する際、中国の悉曇字の衰えによる音韻不通を嘆いて、師の梵字を範として陀羅尼を書して、その読み仮名を加えたことが知られる。

蓮体の刊行した和刻本の『密呪集』を現時点で披見していないが、野沢氏が影印をもって紹介されたことで、陀羅尼の梵字に仮名訓が付された本であることを幸いにも確認し得た。これにより蓮体の和刻本が、まさに浄厳の『法隆寺貝葉梵文対註』のごとき「陀羅尼梵音」の表記を踏襲するものであることが明らかとなる。なお、三十三種の陀羅尼のうち、梵字が当てられていない陀羅尼もあるとの野沢氏の指摘からは、さらに蓮体が師浄厳の字記を参照しつつ、それがない陀羅尼を補うことが出来なかった実態をも知り得、師の字記に未収録の陀羅尼に梵書が無きことを無念に感じていたであろうことも想像される。この蓮体による『密呪集』の刊行は、浄厳の悉曇学が反映した事例として極めて重要で、それが法隆寺貝葉披見の元禄七年から「正徳版経」開版の正徳三年に至る十年程の間に成っていることによっても、この頃、浄厳および浄厳門下の間で梵字表記に関する研鑽が積まれたことが彷彿とされる。同七年を相前後する六年と八年に悉曇字記に関する講説の記録があり、同八年には『悉曇字記鄔那地鈔』一巻の草稿が成ったことが確認される（「年譜史料」）。

しかし、そうした「正徳版経」における浄厳関与の痕跡は、「陀羅尼梵音」や本文右傍に付された仮名訓のみにとどまらず、先に「異本校合」の「別本」が高麗版であると推定したことにも及ぶもので、浄厳が関わった黄檗版の大蔵経がそれを繙くものと考ええる。浄厳は鉄眼道光に見えて「玄機投合、道交特厚」したとされ（『続日本高僧伝』巻第一）、延宝二年（一六七四）頃、秘密壇場における念誦供養の作法次第などに関する密教儀軌（録内儀軌）を鉄眼版大蔵経に

編入し、槩山印房から八帙七十四冊（別に目錄一冊、百八十七部三百二十四卷）を刊行しているが、その鉄眼版の密教儀軌を弟子に伝授する講義の暇に高麗印本と和本密軌との対校を行っていたことが、河内延命寺における初度の伝授にあたる貞享元年（一六八四）に（天野山金剛寺の僧徒の請）、また第三度にあたる同三年（一六八六）から翌年までの江戸牛込多聞院裏息障庵における記録により確認される。⁴⁹ こうした浄嚴師の講義に併行して校勘が行われる学問の構築とその環境が、「靈雲寺藏版」の校勘に如実に反映していると考えられるのである。先に「正徳版経」の変相図や諸本校合の検討の折に浮上した明本系の藏経、とりわけ嘉興藏を想定してみたのも、この鉄眼版が嘉興藏を底本としているためである。ちなみに嘉興藏目録の『藏版経直畫一目録』『五大部外重訳経』に「金光明最勝王経^{十卷}本場字号」が確認される（『昭和法宝総目録』第二卷）が、この嘉興藏の『最勝王経』には梵字表記はない。但し、別に真言陀羅尼を漢字と梵字とで表記する經典も収録され、扉絵の存在もことから、浄嚴との関係において「正徳版経」開版への何らかの影響があったものと推測される。

明本系の大藏経の影響を想定する一方で、諸本校合箇所⁵⁰に西大寺の古写経との一致をみる傾向が多分にあることにも触れたが、浄嚴は延宝七年（一六五九）に西大寺末の律院である教興寺（河内高安郡、現八尾市）を忍空から譲り受け、天和二年（一六八二）に教興寺住職に補任されて西大寺大衆より香衣の許可を得ている。そして、貞享元年（一六八四）に御影堂（祖師堂）を、元禄元年（一六八八）には大殿を建立して同寺を再興し、一門の徒のために『妙極堂教誡』一卷を撰している。それは後に江戸に真言律の道場である靈雲寺を開くに至る重要な拠点であったとみられるが、こうした西大寺との関係をもつて、浄嚴および開版に関わった門徒が同寺に伝来する『最勝王経』を披見し得た可能性も高い。常勝の『註金光明最勝王経』に西大寺自筆本が伝来し、同寺最勝王会の表白や法則に関する附記があることも想起されるところである。「正徳版経」が如何なる本を底本とし、仮名訓を付し、左注を加えたかなど、詳細な本文研究については今後に課題を残すが、幾ばくの手がかりとしたい。

ところで、受容と信仰という側面から『最勝王経』を捉えるならば、密教家である浄厳が「金光明経」の内の同経を選び、「正徳版経」の開版に尽力したのは、まさに義浄がもたらした梵本の陀羅尼にあったということは明らかであり、空海の著述に『最勝王経開題』、『金勝王経秘密伽陀』があることの意義は大きい。加えてまた、空海が顕密二戒の兼修を唱えて制定した『真言宗所学経律論目録』に『根本説一切有部毘奈耶』をはじめとする義浄訳の新律が複数あったことも、如法有部律の道場を開いた浄厳の義浄訳受容の強い意識を感じさせる。⁽⁹⁾ 浄厳の後に誕生し、江戸期の梵学を大成した慈雲の『梵学津梁』に「金光明最勝王経陀羅尼等」や『南海寄帰内法伝』を自ら注解した『南海寄帰伝解纒鈔』もあるなど、⁽¹⁰⁾ 時と場を越えての江戸期に義浄の再評価がなされた跡がうかがえる。梵字と戒律の復興をめざした浄厳およびその門下にとって義浄訳は、有部律を含めた訳経の功績そのものであったように思われる。

しかしながら、上田霊城氏の指摘にあるように、真言陀羅尼に関する高度な梵学を研究域のみにとどめず、その普及に尽したことに浄厳の真意はあった。そうした普及をめざすという面においても、この正徳版『最勝王経』を位置づけることができるであろう。すなわち奈良朝に請来され、平安時代を通じて宮中祭儀の中で国家的行事として恒例化し、僧侶の階梯に関わる經典となつて、権威化されていった最勝講における『最勝王経』に対して、それは將軍から民の間に至るまで同経を浸透させるための訓読と仮名訓が施された編纂であつた。

『金光明略縁起并供養行軌』には、『最勝王経』の具体的な「御経読誦作法」が示され、法華の「南無妙法蓮華経」という題目や、浄土の「南無阿弥陀仏」という名号に相当する『最勝王経』の経題であることが説かれている。そして護符として身に帶持し、口に御経を唱えることの功德により、さらなる弘通がはかられた。おそらく扉絵の梵字・漢字音写・仮名訓の図絵から展開した護符が配布されていたにちがいない。経内に密呪を含む「金光明経」が、その密呪を多分に含む義浄訳の『最勝王経』に至り、大乘經典でありながら密教的な要素を具えて展開・受容されたのであつたが、それはさらに浄厳を介して密教事相を実践する經典として経内に儀軌的な側面を内包させ、広宣流布（滅

業障品」のことば）の裾野を広げるべく、やがて開版されるに至ったことになる。生涯十七度にわたる結縁灌頂を催した浄厳は、三十万四千五十五人の多くの民に伝授したというが、「正徳版経」は、読誦の場に曼陀羅をとり入れ、「陀羅尼梵音」を呪すという、かの法会を場を想起させるがごとき比類なき版経であった。そうした版経の開版を、浄厳の示寂後に師の意を汲んで実現せしめたのは、霊雲寺の第二相慧光和尚（一六六六—一七三四、後の東大寺戒壇院長老）とその門下にある諸徒、そして願主となった井伊直治公の存在であった。浄厳の「陀羅尼梵音」の万人への普及を図る精神は、大洞弁才天堂の建立を万人の力をもって果たすことに重きを置いた直治の精神と一であるように、浄厳と直治と、その『最勝王経』の意義に対する双方の認識の一致が、浄厳が教化した霊雲門下のもとで琢磨され、後の「正徳版経」に結実したとみることができるのである。

その後の流布のこととして、慈高山金剛院への伝来があったわけであるが、これについて聊か記すならば、同寺の住僧が新安流の折紙伝授を受けており、霊雲寺に関連する多くの所蔵とともにそれはあった。同寺本尊の不動明王坐像の両脇の厨子には金剛界と胎藏界の大日如来が安置されているが、両尊が享保二十年（一七三五）九月、同寺第十二世威峻房海住の代に、宝林山霊雲寺第三世慧曦和尚（一六七九—一七四七）が開眼導師を勤めたことが厨子の底面に書かれた識語によって知られる。また、鉄眼の大蔵経開刻に編入した儀軌に関する浄厳の講経を本奥書に書写を重ねた写本一式が所蔵されるなど、浄厳および霊雲寺と同寺との関係は深く、それらに並ぶ聖教として、霊雲寺蔵版の「正徳版経」の収蔵を位置づけることができる。⁽³²⁾

むすびにかえて

宮坂宥勝氏の「日本の密教——平安時代から江戸時代——」⁽³³⁾に、密教の民間信仰の形態に関する「仏教信仰史」の分野の確立はなく、それが未開の領域であることが指摘されている。纔かに一点の事例ではあるが、この「正徳版経」

という經典の発見によって、義浄訳『最勝王経』の江戸期における開版の実態と、読誦・説法という實際の法儀の場が浮かび上がってくる。当該版経が物語る信仰の歴史は、義浄により天竺から南海を経て震旦へと請来された梵本の『金光明経』が漢訳されて本朝へと伝来したことはじまるが、仮名を用いた訓読と、漢字によって音写された陀羅尼が再び梵字に置き換えられ、さらにそこに仮名の訓みを付した「陀羅尼梵音」となることで、当初の「呪」としての梵語音の功德を招かんとする試みが尽くされている。

この「井伊直治願経」が如何なる本を底本として開版に至ったのか、その流れを汲むためにも、『最勝王経』の受容史を丹念に埋めてゆくことが肝要であるが、ここではこの江戸期版経の歴史的な位置を少しく見いだすための点描にとどまった。本文に即して教学と信仰の実態を導き出したいとの思いから、着手からの日浅く、何より浅学ゆえの限界もあるが、小稿が「正徳版経」の經典本文の全文にわたる紹介の一助となれば幸いである。

聖教調査において未調査の近世文獻の収蔵に出遇うこともあるなか、そうした近世期の経文研究の先に、歴史学と交錯しつつ江戸期の学僧の教学と武家との関係を押さえた信仰史の必要を実感することは多い⁽³⁴⁾。また、仏教学の研究に併行して、義浄訳『最勝王経』は夙に『金光明最勝音義』や訓点に関する国語学による厚い研究の歴史がある⁽³⁵⁾。もとより専門の域を越えるが、浄蔵の弟子には『万葉大匠記』を書いた僧であり和学を遂行した契沖がおり、その万葉詩歌における仮名遣いの研究の基には、浄蔵の梵語研究があったことなど、少なからずそれら音義の側面を念頭に置いて向き合うべきことは明らかであろう。

總持寺祖院に収蔵された「宝暦版経」を披見したことで思いがけぬ展開の報告となったが、奇しくも「総持」とは「神呪」、「真言」、「陀羅尼」を示すことばであり、開山瑩山紹瑾師以来の真言陀羅尼を重視する宗門の歴史的経緯を踏まえた所蔵聖教から新たな導きを得たように思われる。印度に起こった『金光明最勝王経』の梵本に込められた密教的要素を多分に含んだ陀羅尼が、義浄によって中国にもたらされて漢訳され、奈良時代に遥か極東の日本に請来

された歴史のなかで、それが江戸の律学復興をめざした浄厳という泰斗に受けとめられ、その可能性が見いだされて開版に及んだのが「正徳版経」であった。⁽⁵⁶⁾ その「正徳版経」が秋葉藏版というさらなる開版を生み、「宝暦版経」として流布されるに及んだ実態が浮き彫りとなるのは興味深い。

『最勝王経』の教理内容に深く分け入って論じるには至らなかつたが、本経が懺悔を主題とする經典であることを忘れてはならず、「滅業障品」に「未作ノ罪ハ更ニ復タ作ラズ、已作ノ罪ハ今皆懺悔セム」という「悔過」の行いと一体であることは至要である。『法華経』に比すれば、その受容という面での流布の広さは劣り、呪術的な側面はともすると受け入れがたい要因になりがちであることは否めないが、「正徳版経」の願主となつた江戸中期の大老井伊直治が浄厳とともにめざしたことは、実践的な『最勝王経』の布教を介して、人と社会に向き合うことではなかつたか。その世に目を向ければ、宝永四年（一七〇七）十月四日、諸国が大地震に見舞われ、翌十一月二十三日、富士山が噴火した。遡れば、日光山東照宮御煤払いにおける御神体の怪異（元禄九年）が新年に報告された元禄十年にはじまり、関東大震災（元禄十年）、諸国凶作（同十二年）、南関東大地震（同十六年）、浅間山噴火（宝永元年）と災害が相次いだ後の、宝永の大噴火であり、翌年には麻疹の流行が人々を襲つた。浄厳は既に世を去っていたが（元禄十五年）、噴火から四年目に大老井伊直治公により発願、六年目にその刊行が成っている。こうした「正徳版経」が開版されるに至るまでの災厄の歴史に思いをめぐらすことは、版経に注がれた幾多の人々の息づかいを拾うことにもなるであろう。

到底免れることのできない自然災害もあるが、気候変動も、疫疫も、人類が及ぼす環境破壊に源があると言われている。人の愚かさが文明の消滅をもたらし、叡智が希望ある未来をもたらす。人心の動揺に相反して、一人一人の智慧が地を覆うという命題を、世界的流行（パンデミック）のなかに思う。疫疫は病原体の毒性により身を侵すものであると同時に、人の心に巣くうことで増殖を果たす側面をもつ。本来の『最勝王経』に内包された可能性とそれが陥る限界とを見究め、人の心と心の狭間に染み入る仏典と宗教的営みについての模索が、正徳版の『最勝王経』のなかに

懇懇と刻まれていることが認められよう。公的記録からは拾い得ないこうした歴史が、たとえばいまなお眠る文化財のなかより甦り、現代に語りかけてくれることを真摯に反芻し、次世代へと繋げることを思う。そうした試みの一つとして、江戸中期に成った「正徳版経」をここに跡付けておきたい。

注

(1) 鶴見大学仏教文化研究所による大本山總持寺祖院における典籍調査(二〇一九年六月十九日から同二十一日に実施)。尾崎正善客員研究員、武井慎悟特任研究員(当時研究生)、小島の三名で経蔵に入り、所蔵聖教の調査を行う中で見いだされた。

(2) 慈高山金剛院は、高野山真言宗別格本山で、東京八王子上野町に所在する(院主山田一眞師、住職山田一能師)。寺地は、江戸開府に関わった大久保長安陣屋跡の翼(東南)に位置し、天正四年(一五七六)の創建になる。金剛院仏教文化研究所における所蔵聖教の整理・目録作成・寺史編纂を担当。寺内に「最勝王経塔」の存在、元の塔の建立場所は旧甲州街道に面した南門(現在は境内整備に伴い本堂裏に移す)。

(3) 渡邊寶陽氏の導きで、宗教文化誌『法華』に「一字一石経の信仰にふれる——安政二年建立の金光明最勝王経塔に遇して——」(『法華』一〇五六号、法華会発行、二〇一三年七月)として、掲載の機会を得た。短い随筆として記したものであったが、この縁により祖院所蔵本の「宝暦版経」を披見した時の確かな認識となった。

(4) 『法華経』の一字一石経の研究については、蓑輪顕量氏「新稿・全米日系人博物館所蔵の「一字一石経」——ハートマウンテン強制収容所墓地跡からの出土品——」(『仏教文化学会紀要』第十七号、二〇〇八年)に導きを得た。

(5) 「宝暦版本」の詳細および總持寺祖院への伝来については、本紀要に所収の武井慎悟氏「秋葉蔵版『金光明

最勝王経」——近世秋葉信仰と總持寺——」を参照されたい。

- (6) 本紀要のワークショップに関する報告の扉にも記したが、調査からワークショップの企画に至る経緯をここに少しく記しておく。總持寺祖院調査時に披見した經典の摺りが「秋葉藏版」であることから、調査時における尾崎氏の助言を請い、秋葉信仰を研究の一つとする武井氏と研究を進めてみることの可能性が生じた。その後、武井氏と様々な研究動向を話す機会を重ね、一つの經典をそれぞれの視座から研究し、その成果をもって祖院への調査報告とすることができると言うことを確認しつつあったが、折しも、世界的に蔓延した未曾有の疫禍(新型コロナウイルス感染症 COVID-19)により、当仏教文化研究所主催の公開シンポジウムの開催(別テーマ)が延期となるなどの事態が生じた。世の中がこれまで行ってきたことを継続することの難しさを増すなか、仏教文化研究所として研究を止めることなく、疫禍にあるこの時に、護国經典である『金光明最勝王経』の研究をささやかなりとも進めてみることは機を得たことではないかと、祖院から見いだされた『金光明最勝王経』に端を発する研究を進め、ワークショップというかたちでの報告の機会を企画するに至った。研究所で開催されたワークショップ(二〇二〇年九月九日)に臨み、金剛院所蔵の二種の『金光明最勝王経』を院主の御理解のもとに借覧し、この機会に研究所の所蔵架となった関連の『金光明最勝王経略縁起』とともに閲覧展示を行った。

- (7) 東北大学付属図書館狩野文庫蔵(第二門一一三)。安永六年(一七七七)。「秋葉信仰」第三編「史料」、(民衆宗教史叢書第三十一巻、田村貞雄監修、中野東禅・吉田俊英氏編、雄山閣出版、一九九八年)所収。

- (8) 「井伊家歴代年譜」「井伊家歴代の居場所」(『譜代大名井伊家の儀礼』彦根城博物館叢書⁵、彦根藩資料調査研究委員会編、二〇〇四年)。

- (9) 『彦根市史』上冊第四編—第三章 末松修氏「政治」(中村直勝編、彦根市役所発行、一九六〇)。「藩史大事典」第

五卷近畿編(雄山閣、一九八九年)。直治に関する研究は少なく、唯一注目される山上降太氏『元禄・正徳期の御大老井伊直興と直該』(郁朋社、二〇〇九年)にも当該版経および周辺の宗教に関わる事象は追えない。『系図纂要』第四「藤原氏二一(井伊^{近江彦根})」や『寛政重修諸家譜』卷第七百六十「井伊(藤原氏良門流)」、『井伊家譜』などの記録に、当該版経の願主となった実態は詳らかならず。

- (10) 鶴見大学仏教文化研究所蔵。本ワークショップに臨んで蔵書となる。『仏書解説大辞典』に確認される所蔵は、版本―京大(合本)、東博・東洋大哲学堂(略縁起)、写本―旧浅野(浅野図書館)。

- (11) 『最勝王経』に関する訓読について、教学の先学を以下に示す。『昭和新纂国訳大蔵経』經典部第四卷(東方書院初版一九二八年、名著普及会覆刻版一九七七年)に義浄訳十卷本『金光明最勝王経』の渡邊海旭氏(一八七二―一九三三)による解題・訓読が収録される。一方、『国訳一切経』經集部五(大東出版社、一九三一年)は曇無讖訳四卷本『金光明経』の中里貞隆氏による解題・訓読が収録される。網代智海氏「国訳金光明最勝王経卷七」「国訳金光明最勝王経卷八」(『国訳密教経軌』第一所収、国訳密教刊行会、一九二〇年)。吉祥真雄氏「国訳金光明最勝王経卷第七」「国訳金光明最勝王経卷第八」「国訳如意宝珠品第十四」(『国訳秘密儀軌』第四卷天等部・明王部、原本発行、一九三〇年/国訳秘密儀軌編纂局編、国書刊行会、一九七三年)所収。重ねて、吉祥真雄氏による翻刻「金光明最勝王経卷第七」「金光明最勝王経卷第八」「如意宝珠品第十四」(『国訳秘密儀軌』第六卷天等部、原本発行、一九三〇年/国訳秘密儀軌編纂局編、国書刊行会、一九七三年)所収。密教関係の国訳は卷第七・八、如意宝珠品に限定。壬生台舜氏『金光明経』(仏典講座二三、大蔵出版、一九八七年)。泉芳璟「梵漢対照新訳金光明経」(大雄閣、一九三三年)、阿満得壽「梵文和訳金光明最勝王経」(光壽会、一九三四年)。(12) 『梁塵秘抄口伝集』卷第十(日本古典文学大系、岩波書店、一九六五年)。後白河法皇の記述の基底には白楽天が晩年に唱えた狂言綺語観の反映が認められる。

- (13) 須藤弘敏氏「第五章 経絵に映る宋と日本」(『法華経写経とその莊嚴』中央公論美術出版、二〇一五年)。
- (14) 李際寧氏『仏教版本』(任繼愈氏主編『中国版本文化叢書』江蘇古籍出版社、二〇〇二年)。野沢佳美氏『印刷漢文大蔵経の歴史——中国・高麗篇——』(シリーズ・アタラクシア vol.3、立正大学品川図書館、二〇一五年)。
- (15) 宮次男氏「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図私見」(『仏教美術』七二、一九六九年)。
- (16) 山崎誠氏「金光明最勝王経の経釈について」(『国文学研究資料館紀要』第二九号、二〇〇三年)に、天台系巻釈(金沢文庫藏安居院唱導資料『言泉集』最勝講帖)との比較研究を見据えた新出南都系巻釈(柳川古文書館藏『最勝王経巻釈』)の翻刻・解題がある。
- (17) 浄嚴が諸徒への密教儀軌の伝授を行うために、黄檗版校本の『文殊師利法宝蔵陀羅尼經』を高麗印本によって比較し、和訓を付した事例が知られる(『年譜史料』元禄七年二月八日)。八節とも関連。
- (18) 西大寺本は十卷揃いの奈良朝写経として現存。大矢透氏が明治末に見いだされ、『西大寺本金光明最勝王経』古点の国語学的研究(『斯道文庫紀要』第一、岩波書店、一九四二年(昭和一七))に全巻コロタイプ写真で掲載、近年、『国宝西大寺本金光明最勝王経』二冊(総本山西大寺編、勉誠出版、二〇一三年(平成二五))に原色・原寸大の影印が示されて、さらなる研究の機会が提示されたことは貴重である。月本雅幸氏「西大寺本金光明最勝王経古点研究史」(同書所収)に西大寺本の行間注記から散佚した注釈書の逸文が判明されるであろうことが示唆されている。
- (19) 『大正新脩大蔵経』第二十一巻、No.1402所収。東西南北の光明電王が登場し、それぞれの名の音写が記される。浄嚴に「消除閃電陀羅尼法」の撰述あり。七節に述。
- (20) 『大正新脩大蔵経』第三十九巻、No.1788所収。正徳年間を数年遡る宝永三年(一七〇六)刊本を底本とする。江戸期の底本であるが、西大寺の奈良古写本にすでに認められるので、当初から当該注記があったものと見

つよう。

(21) 『日本大蔵経』第六卷、経蔵部方等部章疏一所収。西大寺に自筆本が所蔵される。同書の狭川宗玄氏解題によれば、法相を学び唯識に精通、初め興福寺にあつて後に西大寺に移り、南都の内経寺ほか、勅命により滋賀の梵釈寺別当や崇福寺檢校を兼ねたという。大屋徳城氏「日本に於ける金光明経及び最勝王経」(『日本仏教史の研究』第一卷、東方文献刊行会一九二八年、後に『大屋徳城著作選集』第二卷、国書刊行会、一九八七年)。

(22) 『大正新脩大蔵経』第五十六卷、No.2197所収。『仏書解説大辞典』橋本凝胤氏記。『大蔵経解説大事典』河村孝照氏記。慧沼の疏にない「王法為本の護国思想」が認められるとの指摘がある。長谷川岳史氏「慧沼『金光明最勝王経疏』に関する問題考」(『印度学仏教学研究』五〇・一一)。

(23) 『国訳大蔵経』第十一卷(国民文庫刊行会、一九七九年)の渡辺海旭氏の解題に曇無讖訳・合部・義浄訳の三本の内容を比較した表が示されたのを嚆矢とし、教学史研究が展開される。壬生台舜氏「金光明経解題」(『仏典講座二三金光明経』大蔵出版、一九八七年)に梵本と漢訳の対照表、およびチベット語訳の品名対照表が掲げられる。日野慧蓮『金光明経の研究』= A study of the Suvamāhāsoṭamastūtra: 説法師と經典(編纂についてのケーススタディ)(山喜房佛書林、二〇一八年)。なお、本ワークショップにおける宮崎展昌氏の報告で、教学史研究の動向と合部金光明経についての新たな研究成果が示された。本紀要の宮崎氏の論文「(金光明経)の翻訳と伝承に関する諸問題」を参照されたい。

(24) 書紀注釈の基盤研究に加え、井上薫氏「日本書紀仏教伝来記載考」・「道慈」(『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館、一九六一年、初出一九四二年)、皆川完一氏「道慈と『日本書紀』」(『中央大学文学部紀要』一九一、二〇〇二年)などがあり、近くは勝浦令子氏「『金光明最勝王経』の舶載時期」(『続日本紀の諸相』塙書房、二〇〇四年)に研究の動向を踏まえた詳論が展開される。

(25) 『続日本紀』の引用は、新日本古典文学大系本『続日本紀』二(岩波書店、一九九〇)によった。以下、同書の引用はこれに同じ。

(26) 前掲新日本古典文学大系本『続日本紀』補注。

(27) 前掲注18『国宝西大寺本金光明最勝王經』所収、佐伯俊源氏「金光明最勝王經の思想と流伝」。平川彰氏『インド・中国・日本仏教通史』(春秋社、一九七七年)に密教の根底には中觀の空の思想や瑜伽行派の唯識の教理が取り入れられていることが指摘され、中觀・瑜伽の学者が同時に密教僧であるというナランダの例(義浄帰国後)が挙げられる。

(28) 渡辺海旭氏「純密教としての金光明經」(『秘鍵』二一、一九二二年、後に『壺月全集』上、一九三三年)。

(29) 金岡秀友氏は『金光明經の研究』(大東出版社、一九八〇年)の序論で、金光明經の密教的性格が筆者を研究に向かわせた動機の一つであるとしつつも、あくまで同經は純粹大乘經典であるとし、その讚歎・呪法は密教家の事相面に在るもので密教經典には非ず、教相においては純粹の大乘經典と呼ぶべきであると述べて、あえて理論面に関係のない呪術的部分は一切割愛し、純粹思想体系だけに問題の所在を局限したと断りおかれたのは至極最もで、その嚴密な姿勢により、逆に掬い取るべき密教事相の世界觀が浮き彫りとなる。

(30) 中村元氏『現代語訳大乘仏典6 密教經典・他』(東京書籍、二〇〇四年)のあとがきに、旧シリーズ『こころを読む大乘仏典V 完成期の大乗仏典』(東京書籍、一九八七年)では理趣經・大日經・中論・唯識三十頌・菩提行經とともに収載されたが、シリーズの大幅増補改訂(一九九九年中村氏逝去後)に伴い、理趣經・大日經とともに収載された経緯が記される(堀内伸二氏記)。

(31) 藤谷厚生氏「金光明經の教学史的展開について」(『四天王寺国際仏教大学紀要』第四号、二〇〇四年)に広範かつ詳細な教学史が示される。金光明經における陀羅尼の展開図が掲げられ、陀羅尼の内容的変化についての指

摘がある。

(32) 平川彰氏『インド仏教史』上巻(春秋社、一九七四年)、『初期大乘仏教の研究』I(平川彰著作集第三巻、春秋社、一九八九年)。「義浄」(『大法輪』「訳経僧ものがたり」、第四一巻・第五号、一九七四年)。日本大蔵経においては方等部に、チベット語訳の『金光明経』は西蔵大蔵経の秘密部に収録される。後世チベットのタントラ文献の四種の分類では、『薬師経』や『孔雀明王経』などとともに『最勝王経』が第一の「作タントラ」に、第二の「行タントラ」に『大日経』が、第三の「ヨーガタントラ」に『理趣経』とともに『金剛頂経』が挙げられる。第四は「無上ヨーガタントラ」。

(33) 上田霊城氏『浄厳和尚伝記史料集』(名著出版、一九七九年)所収。および同所収『年譜史料』、『徳川実紀』同日条にも記載がある。『行状記』の二月を他史料によって三月に改めた。

(34) 『大洞弁財天祠堂金寄進帳』二百枚綴・全六十八冊(彦根藩井伊家文書「国指定重要文化財、彦根城博物館蔵」、二百七十貫三百三十八文の奉加金を集めた。『井伊年譜』。『彦根市史』中冊第四編―第六章 渡辺守順氏「文教」(中村直勝編、彦根市役所発行、一九六二年)。『滋賀県史』第三巻、(滋賀県編、名著出版、一九七一年)。一般に、弁才・音楽の神である弁才神に財福神(吉祥天との同一視)としての性格が附与され、「弁財」の表記が混在する。なお、彦根市原町の八幡神社末社(龍潭寺井伊八幡宮の末社か)が「金光明最勝王宮」と称される由、何らかの関係があるかと思われるが現時点では未調査。

(35) 『続日本紀』天平十五年十月辛巳条(前掲注25書)。

(36) 大仏再興の開眼供養は元禄五年(一六九二)、大仏殿落慶供養は宝永六年(一七〇九)。拙稿「東大寺大仏開眼供養復原(一)——済深法親王と江戸期再興に関する勧修寺所蔵の法会記録——」(『勧修寺論輯』創刊号、勧修寺聖教文書調査団発行、二〇〇四年)。

(37) 『近世仏教集説』所収。また「年譜史料」および「延命寺相承安流聖教奥書集」(前掲注33『伝記史料集』)に確認される。

(38) 上田霊城氏『浄厳和尚伝記史料集』(名著出版、一九七九年、以下『伝記史料集』)所収の解説「真言密教史上における浄厳の位置」、および同霊城氏「浄厳和尚と真言陀羅尼」(稻谷祐宣氏『普通真言蔵付』東方出版、一九七九年)。遡る上田進城氏「浄厳和尚とその時代の教界(一)・(二)・(三)」(『密宗学報』一五六・一五七・一五八号、一九二六年七・八・九月)。河内長野鬼住の薬樹山延命寺住職。浄厳と真言陀羅尼について上記の進城・霊城両氏の論に尽され、多くの導きを得た。

(39) 前掲注33『伝記史料集』所収。浄厳高弟の維宝蓮体撰。伝記史料の内の筆頭。

(40) 前掲注33『伝記史料集』所収「年譜史料」。

(41) 『法隆寺貝葉梵文対註』。前掲注33『伝記史料集』の「年譜史料」に跋文が収録される。『隆光僧正日記』元禄七年九月三日・五日条。宮田俊彦氏「浄厳和尚の梵学——貝多羅葉の訳文——」(『宝林』八、一九五九年三月)、宮田氏「浄厳和上貝多羅葉解読文——補説——」(『宝林』九、一九五九年五月)。塚本学氏『徳川綱吉』(吉川弘文館人物叢書、一九九八年)。

(42) 写本は東京国立博物館蔵。同館特別展で公開の折に披見。同展示図録『法隆寺献納宝物』(一九九六年)に「梵本心経および尊勝陀羅尼付属訳経記」一帖として掲載される。富田淳氏解説によれば、当該古貝葉は七・八世紀の後グプタ時代のもっとされ、貝葉経の中でも最も古い部類に属すとして重要。『真言密教霊雲寺派関係文献解題』には「梵唐対訳摩訶般若波羅蜜多心経」として元禄十六年尊教、宝暦十年智哲謄写本の識語が掲載される。

(43) 前掲注「浄厳和尚著述目録」(『浄厳和尚伝記史料集』所収)。高楠順次郎氏「悉曇全系図」(『日本梵学史』一九二

二年初出)に「法隆寺貝葉」からの「浄厳流梵字藍本」が位置づけられる。後に「悉曇撰書目録」(高楠順次郎全集)第九卷、教育新潮社、一九七八年)冒頭に附す。高楠氏に梵字は「直接に仏教殊に密教の發達を助け、間接にわが国語發達の動機を与えたること少なしとせず」とする指摘がある。

(44) 上田靈城氏「浄厳和尚著述目録」の「悉曇部」(前掲注33『伝記史料集』)所収。

(45) 三好龍肝氏編著『真言密教靈雲寺派関係文献解題』(国書刊行会、一九七六年)に、昭和二十年の戦火に遭って灰盡に帰したのは痛恨の極みと記される。岡田希雄氏「梵語辞書史概説——心覚より江戸期まで——」(『立命館大学法文学部文学科記念論文集』(立命館出版部、一九四一年)。前掲注43高楠氏「悉曇撰書目録」に立花氏蔵本を一巻と記されるが、調卷の異なる本か不明。

(46) 『大正新脩大蔵經』第四十六卷、No.1956所収。序は賀宗寿撰。

(47) 野沢佳美氏「南蔵本『密呪圓因往生集』について」(同氏『明代大蔵經史の研究——南蔵の歴史学的基礎研究——』汲古書院、一九九八年)、野沢氏編『山口県快友寺所蔵明代南蔵初入蔵經典集』(宗教典籍研究会、一九九一年)に導きを得た。同書南蔵本は大正蔵編纂関連の調査時(昭和十年)に小野玄妙氏が快友寺で初めて見いだされ、陀羅尼が漢字とパスパ文字(元朝世祖クビライ命の新造文字)の併記によることで注目される。南蔵の本朝伝来はほとんどないと言われるが、或いはそうした二種の言語の対翻が浄嚴の「陀羅尼梵音」の手本となったか。近代においては、壬生台舜氏により『最勝王經』各品の陀羅尼の音写と梵文(ローマ字表記)を併記する「金光明経陀羅尼集」が示される(前掲注23『仏典講座』)。

(48) 蓮体の和刻本の所蔵は龍谷大学図書館や高野山大学、法然院光明蔵(『仏書解説大辞典』神林隆浄)。蓮体の陀羅尼に関する著述については、拙稿「金剛寺伝来の宝篋印陀羅尼經と信仰——法舍利としての經典——」(『金剛寺蔵宝篋印陀羅尼經』日本古写経研究所善本叢刊第六輯、国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・文科省戦略プロ

ジェクト実行委員会編集・発行、二〇一三年）をなす折に少しくふれたことがある。蓮体は江戸で活躍する淨厳和尚に代わり、河内延命寺に常住し護持した。

(49) 『妙極堂遺稿』 正徳五年、靈雲寺第三世慧曦編、千葉県靈光蔵写本七卷。前掲注33所収「年譜史料」、初度は貞享元年九月二日、第三度は自三年四月十四日・至四年六月十一日。

(50) 宮林昭彦氏「義浄の戒律観」(『大乘仏教から密教へ』勝又俊教博士古稀記念論集、春秋社、一九八一年)。

(51) 「梵学津梁総目録^{七註}」 第一本詮—十二、第七雜詮—二十、雜詮補—一(『慈雲尊者全集』第九下、思文閣、一九七四年、『大正新脩大蔵経』第八十四卷、No.2711)。

(52) 金剛院仏教文化研究所の所蔵聖教の目録作成に向けた悉皆調査を行うなかで安流・新安流聖教の伝来が判明しつつある。

(53) 宮坂宥勝・松長有慶・頼富本宏編『密教大系』第六卷 日本密教Ⅲ(法蔵館、一九九五年)所収。

(54) 瑩山紹瑾師撰『伝光録』の調査で披見する機を得た松山寺(石川県金沢市)所蔵の莊嚴された祖録に、總持寺祖院を支えた前田家の文化の反映を認め、拙稿「莊嚴の祖録—松山寺本『伝光録』の意匠と加賀藩前田家の文化—」(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第二十五号、二〇一九年)を記した。また所蔵目録の作成の縁を頂いている金剛院においては、その所蔵に萩藩毛利家の文化と宗教とが色濃く投影している実態が判明しつつある。寺院における聖教調査で近世期の寺宝を披見することは多い。もとより平安末から鎌倉期にかけての仏教文化研究に端を発する自らの文献資料学であるが、縁あって披見し得た近世の聖教類との出遇いから、武家の宗教史の一端を見つめることも資料調査における大切な一視座であることを実感する。值遇し得た聖教について、貴重な聖教の次代への保管をも念頭に、ささやかな報告を積み重ねてゆければという思いを新たにするところである。

(55) 『金光明経最勝音義』 古辞書音義集成 第十二卷 築島裕氏解題（汲古書院、一九八一年）。同経典は日本語の歴史に深く関わる。

(56) 小稿は、ワークシヨップの報告をもとに成稿したが、当初の報告で見通しを述べるにとどまった浄厳の悉曇の字記類と「正徳版経」について詰め、八節とした。

〔附記〕 金剛院蔵「正徳版経」首尾・扉絵の原色影印が、神奈川県立金沢文庫特別展『写経と摺経』（高橋秀栄氏解説、一九九五年）で初めて紹介された。

このたび調査・閲覧の御許可を賜った大本山總持寺祖院、ならびに慈高山金剛院院主山田一眞師に、心より感謝申し上げます。

（こじま やすこ・鶴見大学仏教文化研究所特任研究員）